

インターカルチャ INTERCULTURE

NO. 93

2004年5月号
MAY



■■ 学校法人 千里国際学園 Senri International School Foundation (SISF) ■■

千里国際学園中等部・高等部 Senri International School (SIS) 併設 大阪インターナショナルスクール Osaka International School (OIS)
〒562-0032 箕面市小野原西4丁目4番16号 TEL 072-727-5050 FAX 072-727-5055 URL <http://www.senri.ed.jp>

卒業式・入学式
卒業生進路状況
高等部2年沖縄学年旅行
MUN(模擬国連)報告
新生徒ラウンジ



(4/2万国旗に囲まれた入学式)

千里国際学園号の旅

大迫弘和

SIS校長

「カムパネルラ、また僕たち二人きりになったねえ、どこまでもどこまでも一緒に行こう。僕はもうあのさそりのようにほんとうにみんなの幸(さいわい)のためならば僕のからだなんか百べん灼(や)いてもかまわない。」

「うん。僕だってそうだ。」カムパネルラの眼にはきれいな涙(なみだ)がうかんでいました。

「けれどもほんとうのさいわいは一体何だろう。」ジョバンニが云いました。

「僕わからない。」カムパネルラがぼんやり云いました。

「僕たちしっかりやろうねえ。」ジョバンニが胸いっぱい新しい力が湧(わ)くようにふうと息をしながら云いました。

貧しいジョバンニと友人を助けるために死んだカムパネルラ、二人の少年が銀河鉄道に乗って幻想的な宇宙を旅する宮沢賢治の美しい作品『銀河鉄道の夜』の一節です。

電車に乗るということを少し考えてみました。

電車に乗るということは一般的には「乗ること」そのものが目的ではありません。どこかに「着く」ために、私たちは電車に乗ります。目的地があり、その「手段」として、電車に乗るのです。

それでは、電車に乗っている時間というのは、ただ「手段」としての意味しかないのでしょうか？ 電車に乗っている間も「時間」は確実に流れていきます。たった一回きりの時間が。

千里国際学園号をご紹介します。

車内は静かです。犬養道子さんが「ああ気が狂う」(『アウトサイダーからの手紙』)と書くお節介な車内放送はありません。勿論車内は全面禁煙、乗客は育ち盛りの子供たちですから、空気はきれいではなくてはなりません。

車内放送がなかったり、全面禁煙だったり、千里国際学園号では1991年の電車の発車時から当たり前のことも、日本という国の中ではまだまだ珍しいことのようにです。どこそこにチャイムのならない学校が！とかどこそこの地域で学校が全面禁煙に！とか、新聞にまだ仰々しく取り上げられていますから。

千里国際学園号は1号車からは6号車までがS I S席になっていますが、1号車から6号車までにお乗りのお客様は後ろの7号車、8号車に自由にお入りいただけます。7号車、8号車にはその後ろの9号車から12号車までにお乗りのO I S席のお客様も自由にお入りになられます。即ち7号車、8号車ではS I S席・O I S席のお客様により音楽や美術や体育、その他いろいろな活動が一緒に行われているのです。最近では特に生徒会などもこの号車で本当にいきいきとした活動をしています。

更にS I S席の乗車券をお持ちの方なら9号車から12号車までのO I S席の号車に必要に応じお入りいただくことも出来ます。ここではIB ENGLISHのような高度な学習が行われていますが、S I S席の乗車券をご提示いただければ、そのようなコースを受けることが出来るのです。勿論O I S席の乗車券をお持ちの方が、S I S号車で国語の学習をしたり、といったことも出来るようになっていきます。

さて12両編成の千里国際学園号には、S I S席・O I S席のいずれかの乗車券を持った元気で明るく心の優しい子供たちが乗り込んでいるわけですが、乗車券の違いはあっても、子供たちはどの号車もこのように自分の場所にする事が出来ます。S I S号車・O I S号車がひとつになって走り続けています。

特筆すべきは、車内の子供たちの様子でしょう。彼らはただじっと本を読んでいるだけではありません。勿論、

静かに読書に没頭する時間も大切です。しかし、千里国際学園号の車内で生徒たちは、本から得られる知識だけでなく、千里国際学園号を下車した後自分の力で人生をしっかりと切り開いていけるような、真の学力を獲得するためのトレーニングを続けています。乗車中の時間を「目的地」に着くための「手段」にするのではなく、その一瞬一瞬が「手段」以上の意味を持つ、そのような「一回きりの時間」が、千里国際学園号の車内には流れています。

車内は様々な違いを持った子供たちで溢れています。その「違い」故、子供たちは自己と異なる他者を受け容れる力をいつの間にか自然に身につけ、それが車内の優しく思いやりに満ちた雰囲気を生み出しています。

今の時代ほど、人として、自己と異なる他者に対して暖かい気持ちを持つことが必要な時代はないように思えますが、千里国際学園号の乗客たちは、そのことは、本当によくできていると思います。

千里国際学園号は1年ごとにちょっと停車し、下車と乗車があります。これまで13回、停車をしました。その度に、立派な若者になった乗客たちが下車し、比喩的な表現でもなんでもなく、まさに世界中に旅立っていきます。そして昨日までランドセルを背負っていた新しい乗客を迎えます。

千里国際学園号は、これからも、走り続けます。ジョバンニとカムパネルラを乗せた銀河鉄道のように、世界の、人生の、深い意味を、乗客である子供たちが、しっかりと考えていけるような「時間」を車内に流しながら。

僕もうあんな大きな暗(やみ)の中だってこわくない。きっとみんなのほんとうのさいわいをさがしに行く。どこまでもどこまでも僕たち一緒に進んで行こう。
(宮沢賢治『銀河鉄道の夜』より)

第11期卒業生巣立つ

3月6日(土)千里国際学園体育館にて、高等部第11回卒業式が挙行されました。卒業生は、スライドと各自が選んだお気に入りのBGMとともに紹介文が読まれる中、スポットライトを浴びながら赤いじゅうたんから登壇し、ひとりひとりが校長先生から卒業証書を受け取りました。卒業生の輝かしい未来に幸あれ！



最後の贈り物

竹上貴之

第11期卒業生、学園祭収益使途委員代表

僕達が卒業式で森山直太郎さんの「さくら」を歌ってからはや、2ヶ月が経ちました。各々が新しい環境に飛びこんで、可能性を広げようとしています。そんな中、前12年生(第11期生)が卒業記念品として学校にプロジェクターを寄贈した他に、もうひとつこの学園に残していった「モノ」があります。

「さて、なんですか？」

こんなところで隠しても仕方がないので答えを明かしたいと思います。それは「素晴らしき木々」です。桜7本、ケヤキ1本を学園内に植えました。学園空間にずっと存在し続けてほしいという想いがこもっています。植えられた木々にはそれぞれ目印となるように、プレートを付けておきました。どうか、どうか大切にしてください。「素晴らしき木々」を見て僕達の事を思い出してほしいと心から願っています。そして、これらの木々がずっと学園を見守っているということを忘れないでくださいね。



卒業生進路状況

進路情報室

2003年度千里国際学園高等部「大学等合格状況一覧」 2004年4月19日現在判明分

2003年度卒業生徒数90名・過年度生 11名(合格者数は延べ人数) *掲載順序は北から南への地域順

学校名	合格者数	
国公立大学	現役	卒業
北海道大学	1	
一橋大学	1	
筑波大学	2	
東京藝術大学	1	
三重大学		1
京都教育大学	1	
大阪大学	2	1
大阪府立大学		1
神戸大学	1	
神戸市外国語大学	1	

私立大学・短期大学	現役	卒業
慶応義塾大学	6	2
上智大学	5	
国際基督教大学(ICU)		1
独協大学		1
武蔵野音楽大学	1	
中央大学	1	
フェリス女学院大学	1	
関東学院大学	1	
東海大学	1	
金沢工業大学	1	
豊田工業大学		1
平安女学院大学	1	
立命館大学	14	4
京都外国語大学	8	
龍谷大学	2	1
同志社大学	2	1
京都薬科大学	1	
京都産業大学	1	
京都精華大学	1	1
関西大学	6	4
大阪薬科大学	1	
大阪国際大学	1	
大阪芸術大学		1
近畿大学	2	
追手門学院大学	1	
桃山学院大学	1	
宝塚造形芸術大学	1	
関西学院大学	12	1
神戸女学院大学	6	1
甲南女子大学	2	
甲南大学	1	
関西外国語大学	2	1
梅花女子大学	2	

学校名	合格者数	
私立大学・短期大学	現役	卒業
武庫川女子大学	2	
日本赤十字広島看護大学	1	
神戸常盤短期大学	1	
白鳳女子短期大学	1	

専門学校	現役	卒業
日本生命済生会	1	
付属日生看護専門学校		
大阪府医師会看護専門学校	1	
豊中看護専門学校	1	
国立病院大阪医療センター	1	
付属看護専門学校		
大阪外語専門学校	1	
ロイヤルグルーミングスクール	1	

海外の大学	現役	卒業
Temple Univ.	1	
Amherst College	2	
Bates College	1	
Macalester College	1	
Pomona College	1	
Williams College	1	
Middlebury College	1	
Ohio Wesleyan Univ.	1	
The College of Wooster	1	
Univ. of Melbourne	1	
Univ. of Oregon	1	
Eckerd College	1	
McMaster Univ.	1	
Univ. of Adelaide	1	
Elizabethtown College	1	
Univ. of Newcastle Upon Tyne	1	
The University of Edinburgh	1	
Spring Hill College	1	
Stetson University	1	
Juniata College	1	
Univ. of Missouri-St. Louis	1	
Butler Univ.	1	
Linfield College	1	
Oregon State Univ.	1	
Pitzer College	1	
Earlham College	1	

その他結果待ち数件

5ヶ国語で宣誓

入学式

4月2日(金)、雨も上がり薄日の差す中、第14回入学式が体育館において執り行われました。62名の中等部入学生と86名(うち、内部進学生67名)の高等部入学生が、音楽科森路佳先生の指揮によるミドルスクールバンドの演奏のなか、照れながらも、誇らしげに入場してきました。まだ、小学生の面影を残した中等部新入生と体格だけでなく内面的にも3年間の成長をはっきりと感じさせる高等部入学生、どちらも満開の桜に負けないほど晴れやかな姿でした。

毎年恒例の生徒宣誓。今年は5ヶ国語で行われました。緒方良輔さん(7年、日本語) 柯競雄さん(7年、中国語)、李千恵さん(7年、韓国朝鮮語)、榎木亜友美さん(7年、スペイン語)、カブリーニ・アイシャさん(7年、英語)の5人がそれぞれの言語で世界人権宣言に基づいた生徒宣誓が行いました。その後、中等部生徒会の杉原翔さん、清水航さん、高等部生徒会の新見真史さん、サイラッド・クリスティーンさんのユニーク歓迎の言葉で、緊張もほぐれ和やかな入学式となりました。新入学生のみなさん、Welcome to 千里国際学園!



春学期帰国生紹介

ここでの「帰国生」には帰国A・帰国B入試を受験した国内国際学校出身者を含みます。(アドミッションズオフィス)

学年	姓	名	Last	First	在留国						
07	青木	ゆり	Aoki	Yuri	アメリカ	07	松原	正幸	Matsubara	Masayuki	アメリカ
07	カブリーニ	アイシャ	Cabrini	Aysha	イギリス	08	小林	朋世	Kobayashi	Tomoyo	デンマーク
07	鈴木	景	Suzuki	Kei	アメリカ	08	梁井	彩	Yanai	Aya	イラ
07	中野	万里	Nakano	Mari	オーストラリア	09	佐野	絵理	Sano	Eri	アメリカ
07	小竹	京子	Kotake	Kyoko	ドイツ	10	白浜	龍男	Shirahama	Tatsuo	中国
07	友井	智弘	Tomoi	Chihiro	日本国/オーストラリア	10	亀井	拓	Kamei	Taku	日本
07	山添	歩	Yamazoe	Ayumu	アメリカ	10	矢野	美穂	Yano	Mihoko	フィジ
07	柯	競雄	Ka	Sachio	台湾	10	片岡	亮平	Kataoka	Ryohei	アメリカ
07	李	智恵	Lee	Chie	日本国	10	谷	ソラ	Tani	Sora	韓国
07	西尾	辰洋	Nishio	Tatsuhiko	日本国	10	福島	愛巳	Fukushima	Manami	シンガポ
07	為岡	稚子	Tameoka	Wakako	日本国	10	丹波	友里	Tamba	Yuri	マレーシ
07	康	鈴香	Kang	Ryong Hyang	日本国	10	郷原	晴香	Gohara	Haruka	台湾
07	ジョンストン	タバサ	Johnston	Tabatha	アメリカ	10	野本	由布	Nomoto	Yuki	タイ
07	島田	さつき	Shimada	Satsuki	タイ	10	田山	佳奈	Tayama	Kana	タイ
07	北野	雄也	Kitano	Kazuya	オーストラリア	10	有村	美樹	Arimura	Miki	シンガポ
07	高橋	直人	Takahashi	Naoto	オランダ	11	吉岡	佐知	Yoshioka	Sachiko	アメリカ
07	日浦	みな美	Hiura	Minami	オーストラリア	12	木村	友果	Kimura	Yuka	ニュージー
07	佐野	貴	Sano	Takashi	アメリカ	12	竹中	大將	Takenaka	Hiroyuki	カナ
07	西本	峻	Nishimoto	Shun	シンガポール	12	大谷	美鈴	Otani	Misuzu	イタリ
						12	半井	恵未	Nakarai	Megumi	イギリ

異動のお知らせ

＜新任＞

森香奈子

国語科

はじめまして。4月から国語の授業を担当しています。この学校に集う皆さんに出会えて、とても嬉しく思います。

私は、「出会い」を大切にしています。ヒトやモノと出会うたびに、自分の世界が広がっていくからです。これからこの学校で、どれだけ世界を拡げることができるのだろうか…と、ワクワクしています。また、私との「出会い」が、皆さんの世界を拡げられるものであればいいなと思っています。

春は、9年生の国語と10年生の現代文、12年生の古典演習を担当することになりました。他のクラスの皆さんも、気軽に声をかけて下さいね。

ここで過ごす一日一日、一瞬一瞬を大切に、一つでも多くの世界と向き合っていきたいと思っています。よろしくお願いします。

佐伯昭洋

数学科

この春から数学の非常勤講師としてお世話になる佐伯と申します。本校に来るまでは、兵庫県の私立高校や公立高校で教鞭をとっていました。いきなりですが…

「 $1 + 1$ はいくらでしょうか？」

このような問題がテストで出題されたらとすると、みなさんはどのようにお答えになるのでしょうか？おそらく「2」という解答が大半だと思います。算数の世界ならそれでマルをもらえるのですが、数学では正解はこれだけとは限りません。

私達は無意識に「1」という数字、「+」「=」という記号を解釈して計算します。しかし、これは我々が勝手に解釈しているだけで、厳密には問題文だけを見るとこれらの数字・記号の意味が書かれていません。つまり、このままだと、これらはただの棒線に過ぎず、「これをこういう意味である」

という取り決め（定義付け）さえ行えば、無数の解答が生み出されてしまいます。

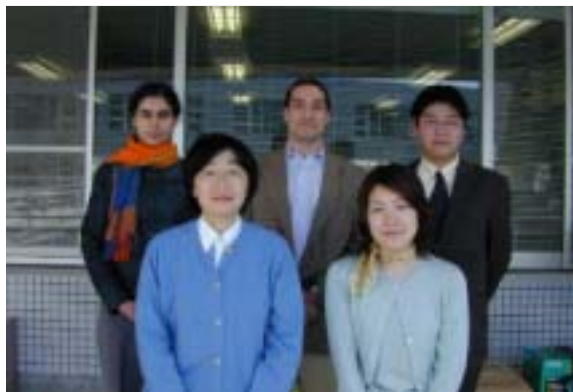
例えば「1」という数字が2進法だという取り決めを行えば「 $1 + 1 = 10$ 」となり、また、「1」を花束と解釈すると、「1（束）+ 1（束）=（大きい）1（束）」という解答も考えられます。数字や記号をただの「棒」と解釈すると、「田」という答えも正解なのです。

「 $1 + 1$ 」という一見単純に見える問題でさえ、これだけの解釈が考えられます。より複雑な問題や日常的な事柄では、これより遥かに多い解釈（誤解）がなされることでしょう。物事をきちんと説明する大切さ、これを授業を通じて生徒に伝えることができたと思います。まだまだ若輩者ですが、よろしくお願い致します。

北村庸子

情報科

始めまして、情報科、非常勤講師の北村庸子です。この5年間は兵庫県の県立高校で、情報等を教えてきました。大学卒業直後、メーカーで仕事をしていましたが、当然のことながら最近のコンピューター、通信機器の発展には目を見張るものがあります。コンピューターを普通の文房具のように道具として使いこなせるのがあたりまえ、という時代がすぐそこまで来ているように思います。そう思うと、学びの道具としてのコンピューターを教えることの責任の重さを、改めて感じています。また、SISに来てすべてが生徒を中心に行われていることを日々実感し、私自身がさらに多くのことを共に学んでいければと思っています。どうぞよろしくお願い致します。



後列Tricerri先生、Tabatabai先生、佐伯先生
前列北村先生、森先生

Rob Tabatabai

English

Hello Everybody!

I am from England and have been living and working here in Japan for 6 years. However I have been lucky enough to live and work in a variety of countries including Australia, Belgium, France, Germany, Holland, Ireland and the USA. It is a great pleasure to be working here in such an international environment, where there are so many students and teachers who have traveled, worked, lived or are interested in living, in so many countries! I have a wide variety of interests and am happy to freely answer any questions you may have!

Elisa Tricerri

French

Bonjour à tous

My name is Elisa Tricerri. I am from Strasbourg which is a really nice city in the North-East of France. Because of my strong interest in Japanese culture I have studied it 4 years.

I came to Japan, in Osaka, more than 3 years ago and started working for the Alliance Francaise- Nichi Futsu center. Since that time I have been enjoying my life in Japan. My hobbies are Ceramics, cooking, discovering new things and traveling around Kansai and Japan. I want to do my best to make all the students love the French language. I am looking forward to working with all the staff, the students and the parents in a good atmosphere.

A bientot.

Ruth Steinhoff

Germany

My name is Ruth Steinhoff and I am from Germany. Since three years I am living here in Minoh. The time before I came to Japan I have been lived 6 years close to Stuttgart. I am married and I have a son which is 5? years old.

Before I become a mother I worked 13 years in the industry for different tasks. I taught new staff and our team built up the total quality management? ISO 9000 - for the company. The last two years I taught German language for a group in the medium age class which tried to improve their knowledge from their university.

The time in Japan is exciting. I start learning really about Japan since I am here. It is very different from them which is public known in my country. The culture from Germany is different and this is what it makes so interesting for me to stay here. Furthermore a lot of similarity in our countries in relation to the history and for the character of the people is still there.

Together with Shinobu Katsuragi I will teach the German language at the school. The combination of grammar lessons and speaking practice is our main concern. I want to have a good work together with all pupils, parents and the staff.

The "sakura" is a perfect welcome for me to start here.

Thanks

<退任>

アニコ・アダム (教育職員)
セリーヌ・デュエ (教育職員)
河合英美 (教育職員)
箕浦尚美 (教育職員)
石田純子 (教育職員)
竹内 清 (警備員)
三浦 浩 (警備員)

生徒たちの活躍が本になりました!

『レンズの向こうに自分が見える』 出版

原 和久

OIS日本語科

10年生以上のOIS日本語クラスでは、自分自身のあり方や友達との関係を見つめるきっかけになればと、3年ほど前から国際文化フォーラムが主催する「高校生のフォトメッセージコンテスト」に参加しています。仲のいい友達や気になる友達の写真を5枚撮影し、同世代の高校生に伝えたいメッセージをつけて応募するのですが、レンズを通して友達と関わり発見したことを自分自身の言葉で表現するこのアクティビティーは、同時に自分が何者なのかということをつかむよい練習にもなっているようです。幸い、昨年度は2名が努力賞、そして今年度はOIS11年生のジミー・ビューリー君がみごと優秀賞を獲得しました。

この度、日本語クラスでの「フォトメッセージ」の取り組みとビューリー君をはじめとする生徒たちのエピソードが岩波ジュニア新書『レンズの向こうに自分が見える』(野村訓編著)として出版されることになりました。SIS12年の仲谷環さんやOIS11年の多谷亮太君の写真、そしてビューリー君の手記も掲載されています。生徒たちのエネルギーあふれる写真と文章を、ぜひ手にとってご覧ください。



国際文化フォーラム・フォトメッセージコンテスト入賞作品

http://www.tjf.or.jp/photocon/pastwork/b_2003.htm

岩波書店ホームページ

<http://www.iwanami.co.jp/hensyu/jr/index.html>

野村訓 編著『レンズの向こうに自分が見える』

出版社: 岩波書店 ; ISBN: 4005004652 ; (2004/03)価格: 777円(税込)

■ 目次

- 1 写真を撮るってどういうこと? (野村訓)
 - 2 写真は心のレントゲン (野村訓)
 - 3 友とかかわる 社会とつながる
- インターナショナルスクールの日本語教室から (原和久)
- 4 こうして自分が見えてきた 写真と出会った僕 (ジミー・ビューリー) 他

■ 内容

写真を撮る ことは、まだ自分で気づいていない自分自身を撮ること。この本ではOISと定時制高校の6人の高校生たちが、カメラを通して人と出会い、自分の本当の居場所を見つけ、自分を生きることができるようになった過程を、彼ら自身の写真作品と文章でたどります。

学年全員で作らあげた旅行

2003年度11年沖縄学年旅行

阪口冬子

高等部3年、旅行委員会委員長

さかのぼれば1年前の1月。カフェに学年で集まり、旅行委員に名乗りを挙げたメンバーが、それぞれの旅行に対する熱意を述べた時のことを今でも覚えています。そして承認を得てから3月までの一年二ヶ月、私達が歩んできた道のりは、間違いなく平坦なものではありませんでした。委員会がすんなり終わることはほとんどと言っている程なかったし、激しくもめたこともありました。

そんな中、常に大前提としてあったのは、「学年全員で作る旅行」だということ。できるだけ学年全体との疎通をはかろうと、意識調査や多数決で意見を聞き、それを基盤に進めてきたつもりです。だから、テーマ（：一期一会。それぞれ自分の一期一会を決め、達成の瞬間を写真に収めるというもの）決めから行き先・プラン決めまで、委員で様々な意見をぶつけ合い、思考を凝らして活動してきた中に、無駄なことは一つもなかったし、全てがあってこそ後の成功に繋がったのだと思います。

「何持ってくる?」「カバンどうする?」と皆が騒ぎ始めたのは1週間前。なかなか実感が湧かないまま、出発を明日に控え、11年生を終えました。では、私達の輝かしき5日間をご紹介します。

1日目：高まる興奮を乗せた飛行機は、第1の舞台・石垣島へ。島内観光時は、バスの窓から広がる世界に皆釘付け。家に飾られたシーサーなど、沖縄ならではの風景に目をやるとは、沖縄の地にいるのだという喜びを噛みしめていたことでしょう。一行は民俗園へ行き、八重山の文化や動植物を、五感をフルに使って楽しみました。

2日目：鍾乳洞で自然の神秘を感じた後、グラスボートで目に映る海底の魚やサンゴに感動。そして“これぞ離島”竹富島へ。石造りの堀に歴史ある家、それに何とも映えるハイビスカ



ス。その町並みを水牛車に乗って楽しみ、それぞれの民宿へ（ここでは4つの民宿に分泊）。夜は再び集まり青年会の方々と交流会。エイサーをご披露、レクチャーしてくださり、会場は音楽と笑い声に包まれ、大いに楽しみました。竹富では、交流会でも民宿でも、現地の方の温かさを感じられたと思います。

3日目：無人島へ。美しい自然を感じ、昼食はBBQ。ここで旅行委員から一人一人へTシャツをプレゼント。水遊びも楽しんだ後、小浜島を経由して、再び石垣へ。ホテルでの夕食時は、1日目から引き続き、なかなかハイレベルなものまねなどで盛り上がりしました。

4日目：那覇へ移動し、ひめゆり資料館での講和や壕の追体験で平和学習。楽しむ気持ちとは一旦離れ、沖縄戦争に身近に触れ、みんながそれぞれの思いを感じました。最後の夜。驚くほど綺麗なホテルでの琉球パーティーでは、グループ別のパフォーマンスやゲームで、盛り上がりは最高潮に。それと同時に、沖縄との別れを惜しむ気持ちも皆の胸にはあったらと思うます。

最終日：体験学習ができる琉球村での時間を過ごし、国宝・首里城へ。そして国際通りでの買い物を楽しんだ後

のバスで聞こえた言葉・・・「俺はみんなとのかけがえのない思い出を買ったよ（笑）」

こんなセリフを言ってしまうのはA君ぐらいだけど、皆の心にも確実に同じ思いがあったはず。みんなで行った沖縄学年旅行の思い出が、何よりも価値のあるものとして、一生ものの財産として、いつまでも一人一人の心の中にあり続けるでしょう。みんなで一緒に過ごした時間、現地の人との出会い、それぞれが見て、感じたこと、自分の一期一会、この旅行を実現する上で欠かすことのできないたくさんの方々の存在——プラン決めから当日まで、その敏腕ぶりで私達を引っばってくださった阪急交通社の穴井さん・同じく常に素敵な笑顔と優しさで私達を包んでくださった福田さん・旅行中も常にマラソンのことが頭にあった馬場先生・カメラマンとしても奮闘してくださったファイファー先生・まさかの車椅子の状況でも変わらぬサバサバぶりだった土佐先生・生徒に負けない笑顔でみんなの写真に写っていた平尾教頭先生・幸いケガ、病人が少なかったことから常に行動を共にできた弥永先生・見送り、お迎えに来てくださった大迫校長先生・そして旅行委員に大きな力を与え続けてくださった井

(次ページ★に続く)

「色彩体温」イベントを目前にして

彩都プロジェクト

加賀奈穂子

高等部3年

「色彩体温～Color Communication～」を考え出してからおよそ8ヶ月。この原稿を書いている今はイベント開催まで一ヶ月を切った地点にいます。まもなく、前代未聞（素晴らしいすぎて・・・）の国際交流イベントが幕を開けます。私たちらしい国際交流の原点を見出し、たくさんの人に感じ取ってもらいたい、またその中で高校生と大学院生のコラボレートとして活動している彩都の素敵さを見てもらいたい、そう思っただけのイベントも今では、最初に想像していたよりもずっとずっと壮大なものとなりつつあります。色彩体温は簡単にいうと6つの国とそのワークショップで成り立つイベントです。午前中は各国の広場へ行きその国の紹介やパフォーマンスなどを見て回り「国」を感じ取ってもらいます。そして午後は1つの国の教室に滞在し、ランチをして、ワークショップを体験してもらいます。最後には大きな劇場となるステージ上で、参加者の方と各国で教えていただいた講師の方が共にコンサートを開くという形になっています。

一つのイベントを計画するのがこんなに大変だったということを、私はこの8ヶ月間の活動を通して身にしみて

知る事ができました。このイベントを作り上げるには、まず6カ国で活躍して下さる講師の方々の協力が必要でした。しかしその講師の方々を見つけ交渉や交流をさせて頂くまでの準備も自分達の仕事でした。それから当日必要になる材料や食材の見積もりとその購入、広場の飾りつけからステージのデザインと作成、道や看板を含むインフラ設備など本当に一から全て「自分たちの手で」というモットーにこだわったイベントは一つ一つがものすごく丁寧に扱わなければいけない仕事ばかりでした。しかし、そうしてその都度知恵を出し合い話し合いをしていく過程において、私達彩都メンバーはたくさんの素敵な人達と出会うことができました。IMI大学院生のメンバーや先生方とは1年半前からの付き合いでしたが、その上に1月SIS/OISから募集した約30人の色彩体温イベントスタッフ、費用やインフラ面でサポートして下さる社会の人々（国際文化交流センター・大阪の行政・メディアラボ・業者・ラジオ他）、そしてイベント当日にかかせない様々な国から来た音楽のプロ・民芸の職人・各国の料理人のみなさんとの出会い、活動を共にしてきました。その中では時にそれぞれの文化や考えの違いにおいての衝突などもありましたが、本当に今では一つの大きな（そし



て愉快な）「仲間」としてイベントへ向けて頑張っています。

今はまだ信じられないけれど、この記事が皆さんに読まれる頃にはイベントは終わり、彩都メンバーとその仲間は皆一段落ついていることでしょう。しかし今はイベント当日の5月1日まで一ヶ月という所なので楽しみにしている反面緊張もしていますが、こんなにたくさんの人達が協力してくださって、こんなにたくさんの力と時間を費やしてきたのだから、必ず成功すると信じています。そして参加者全員に私達が見つけた「国際」を感じてもらい、私達の里山が一つの世界になる瞬間を見てもらいたいと思います。ああ、なんて規模の大きい青春の形・・・本当に彩都は自分の成長を見守ってくれる最高のプロジェクトです。この全てを受け入れ、見守ってくれる大きな里山でこれからも皆とどんな未来の町づくりのため活動を続けていきたいと思っています。

（★前ページの続き）

藤先生・もちろんそれぞれ私たちの保護者。全て忘れてはなりません。

この場をかりて。この1年、委員長としての私には常に不安がありました。それだけ自分のやってきたことに自信がありませんでした。たくさんの方に迷惑をかけたし、本当にお世話になりました。たくさんの方——先ほど紹介した方々、そして学年のみんな、全員です。勝手ながら、皆様の存在は私にとって絶大でした。本当にありが

とうございました。委員長として胸を張ることはできないけれど、みんなと共にこの旅行を作り上げたことは、私の誇りです。また、旅行委員のメンバー、みんなと旅行までの時間を共有できてよかった。本当にお疲れ様でした。

恐縮に思いますが、委員として、みんなから「ありがとう」の言葉をいただくことが何度かありました。けれど皆さん、自分に対しての感謝の気持ち

を忘れていませんか？この旅行は、みんなで作上げたもの。旅行作りに手を出し、実現させ、めいっぱい楽しんだ自分自身にも「ありがとう」を言いましょ。

輝かしき青春の1ページを書き足したみんなに 巧

バイリンガリズム通信

授業「バイリンガリズム」より②

井藤真由美

英語科

前号でも書かせていただきましたが冬学期開講の選択授業「バイリンガリズム」では 定義と測定 言語学的見地 社会問題 心理学的見地、と、バイリンガルに関する問題を多角的に捉えようとしています。それぞれについて実験レポートやリサーチペーパーなどを書いたものを一学期間のポートフォリオとしてまとめ、ただいま図書館に置いていただいていますのでぜひご覧ください。

さて、今回は上述の で行った、コードスイッチについての実験レポートより受講生たちの発見を紹介させていただきましたが、今回と次回と二回に分けて、 の社会問題についてのリサーチペーパーでどのようなテーマが取り上げられたかを簡単に紹介させていただきますと思います。

日本語で「バイリンガル」というと「英語」と「日本語」ができる人、という狭義に捉えられている感が否めず、また一般的には非常に特殊な現象と捉えられがちですが、地球全体から見ると事情はまったく違います。学者によってばらつきがありますが地球上に言語は3,000~6,000語存在するといわれていますから、国家の数が約200であることから単純に割り算すれば一国あたり平均15-30語ということになります。当然さまざまなバイリンガル（マルチリンガル）環境が世界中にはあり、地球全人類のうちバイリンガル（マルチリンガル）人口は全体の70%ともいわれています。世界中にはどのようなバイリンガル環境があるのか、それぞれどのような問題を抱えているのか、また言語政策が立てられる場合どのようなプラス面とマイナス面があるのか・・・これらのことを知ることは、世界をよく知る、という意味ではもちろんですが、日本の状況を、そして私たちOIS/SIS環境でのバイリンガル事情を再認識再考察するよい機会でもあると思います。

* 金光末帆さんは、SISに編入するま

での3年間で過ごしたスイスにおいて4つの公用語（Swiss German, French, Swiss Italian, Romanche）がいかに共存しているか、その長所と不便な点をまとめました。それぞれの言語話者は63.6%、19.2%、7.6%、0.6%、そしてこの4つの言語以外を母語として話す人口が全体の9%もを占めるということです。

* 小川佳泰くんは、同じく以前住んでいたカナダにおけるフランス語のイマージョン教育についてまとめました。SISの言語ポリシーも「一部イマージョン」というように日本でも最近使われるようになった、この「イマージョン」というバイリンガル教育方針、発祥地はカナダです。いかにこのバイリンガル教育が成功し、世界で規範とされるようになったのか、ということについて、「一部イマージョン」を行っているSISにいる皆さんにもぜひ知っていただきたいと思います。

* 尾崎真奈美さんは、Sign Language（手話）の位置づけについて、日本と他国との違いを指摘しました。システムティックな文法構造を持つ『Sign Language』は、アメリカ、スウェーデンなど多くの国でひとつの「言語」として位置づけられています。そして聴覚障害をもつ人にとっての『第一言語』であるべく教育を行い、別の言語の読み書きができるのであれば『バイリンガル』であるとみなされています。残念ながら日本ではそのような対応がとられていないという現実をぜひ皆さんも知って考えてみてください。

* 松村実果さんは、日本での移民受け入れの現状について、『移民の日本語習得と母語の保持』に焦点を当ててリサーチしました。移民受け入れの歴史が浅いということを差し引いても、日本に住む移民（に限らず外国人一般）に対しての言語教育の方針はまだまだ遅れていると言わざるを得ません。日本語での指導の仕方や、また、母語や母国の文化を保持することの大切さは一般に日本の学校社会でよく理解されているとはいえない現実があります。実果さんは、この点についてリサーチ

したことをまとめるだけでなく、自分が小学校時代をすごしたアメリカでのこと、10歳で日本に帰ってきたときの経験をからめて書いてくれました。

* マランティナさんは、アメリカでのEnglish Only Movementについてレポートしました。アメリカは、これまでの短い歴史の中で、バイリンガル教育を推し進めるか否かについて時計の振り子のようにその方針が大きく両極端に揺れてきた国です。上記の松村実果さんのレポートが語るように、移民を積極的に受け入れ、その子供たちに母国の言葉と文化を保持させながらバイリンガル教育を提供している国、という面もありますが、その反面「英語のみを公用語として設定し、英語を国語とすることで国としての統一感を高めよう」とする考え、動きも盛んです。ティナさんはこの考えの長所短所を客観的に述べた後、この考えに反対する立場で自分の意見をまとめてくれました。

バイリンガリズムの専門家のGarciaという人は、社会とバイリンガリズムの関係を花園にたとえています。いくらきれいな花でもひとつの種類と色だけしか存在しなければ感動は薄れるでしょうが多様な花に埋もれた花園は心を豊かにしてくれる、ということと同じように社会においても多様な言語が存在することは私たちに豊かさや感動を与えてくれる、と説明しています。そしてその色とりどりの花園を維持するのが簡単なことではないのと同じく、言語を保持していくことは時にとても困難なこととなります。次号（6月号）では言語の保持、クレオール言語などに関するレポートについて紹介したいと思います。

ここでは簡単な紹介のみとさせていただきますので、詳しい中身はぜひ図書館でフォルダーを手にとって読んでいただきたいと思います。

コードスイッチングについて - 5 二つの言語の文法がぶつかるとき

難波和彦

英語科

コードスイッチング(CS)が起こっている時、二つの言語が一見むちゃくちゃに混ざっているようでも、実はかなりの程度までルールに従って行われていることが説明できる、ということを前回までのこのコーナーで、見てきました。話し相手や場面によって言語を使い分ける、という大きな単位でのCSもあれば、ひとつの文の中で使い分ける、小さな単位のCSもあります。特に、小さな単位の中で二つの言語を使っている場合は、“ごちゃ混ぜ”の印象があります。このとき、二つの言語の文法がぶつかって、どのようなことが起こっているのかというのは、興味深いことです。前回、前々回紹介したMLFモデルでは、母体になる言語=ML (Matrix Language) に、もう一方の言語がEL(Embedded Language)として埋め込まれているという考えかたで、この現象を説明しようとしています。

今回は、このコーナーの読者が送ってくれたまとまったデータを使って、CSを分析してみます。次の一連の文章は、OISの元生徒会長で、今イギリスのロンドンにあるImperial Collegeの大学院でEarthquake Engineeringを学んでいるJennifer小川さんが、送ってくれたものです。彼女は、ふだんの生活では、英語のみを使っているのですが、OIS/SISの卒業生と再会したときは、CSをふだんに使った話しかたにもどると言います。この文章は、彼女が元OISの友人とのeメールのやり取りのなかで、友人が芸能人の郷ひろみに出会ったという話返答をしているところからはじまります。

“あのひろみごう//すごーい!! そういえば / I remember / he got married to this rich Japanese lady / she lives in NY / and he moved over there なんだよね ~ // me は I'm on my last week of term / and working on this project なんだ。 // I'm gonna see Boon & Masa tomorrow / probably meet up in China town / and have a nice dinner or something, / but I have to move out of my hall by Saturday / so けっこう忙しくしてます // でも it will be a little break かな? // でもよく考えたらさ / it's really weird to meet those two in

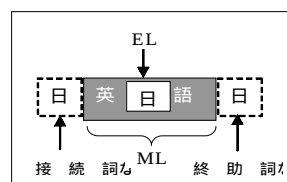
London. // ぜんぜん想像つかないな ~ // おかしいね、人生って // あははは ばばくさ ~い // Anyways, I better get back to my 大学の coursework... // ふ..終わらせるぞ ~ ~ ~ // じゃ I'll また write to you soon // I'll 報告する you how it was / またね ~. “eメールの文というのは、書き言葉ではあるのですが、ふつうの手紙などに比べると、話し言葉に近いものがあります。ここでは、二つの言語がどのようなバランスで、使われているのかを数の面から見てみます。文=sentenceを数える基準としてみると、(上の例では、二重の“//”がsentence間の区切り) 14のsentenceがあり、そのうち日本語だけのsentenceが6、英語だけのsentenceが0、日本語と英語の混ざったものが8あります。この数え方では、英語のほうが少ないようですが、そのようには見えません。

それぞれのsentenceをよく見ると、次のようなものもあります。”でもよく考えたらさ、it's really weird to meet those two in London”これは、文としては1つですが、日本語と英語の境目がはっきりしていて、二つの言語の文法がぶつかっている、とは考えられません。これは、二つのclause (節) でできた文であって、日本語のclauseのあとに、英語のclauseが来ています。clauseというのは、主語+述語+áという、ひとつのできごとなどを表す基本の単位で、このclauseを作るのに、各言語特有の文法が使われます。sentenceよりも、clause単位でみたほうが、ふたつの言語の使用量のバランスや、二つの言語の文法が、どのようにぶつかっているのかが、よくわかりそうです。上記の文章をclauseで区切ってみます。(一本の斜線/“がclauseの区切り)ここでは、25のclauseがあり、英語のclauseが8、日本語のclauseが9、そしてミックスされているものが8あるということになります。sentenceの単位で見たときに比べると、二つの言語がバランスよく使われているように見えます。

二つの言語がミックスされた8つのclauseを見てみると、二つの言語がぶつからずに、きれいに切り替わっているものが見えます。ひとつは“so けっこう忙しく ~ “、“じゃ I'll ~”、“でも it will ~”いうように、clauseの先頭部分にきて、話をすすめるつなぎ目になっている言葉です。い

わる接続詞とか、discourse markerとかいわれる言葉が、この役目をしますが、ここでCSが起こっても二言語の文法に“ぶつかり”は生じませんし、“むちゃくちゃ”という印象も受けないでしょう。“えっと”といってから、英語の文をいうような場合も、これにあたります。もうひとつは、“~ over there なんだよね ~ “、“~ on this project なんだ “、“~ break かな”といったようなclauseの一番最後に来て、話相手に同意を求めたり、疑問をなげかけたりするような役目をしている言葉です。日本語では終助詞、英語ではtag (It's hot today, isn't it?の“isn't it”の部分)がこの役目をします。ここで、CSが起こっても、文法的にも、聞いた感じでも、問題はなさそうです。

ということで、clauseから、先頭にくる“つなぎ目のことば”と、最後にくる“話し相手とのinteractionに関係することば”の部分をものぞいた部分で、CSが起こっているものを見てみると、“二つの言語の文法が、どのようにぶつかっているのか”ということが見えそうです。“₁₎ me は I'm on my last week of term”, “でも” ₂₎ it will be a little break かな? “, “Anyways, ₃₎ I better get back to my 大学の coursework. “, “じゃ” ₄₎ I'll また write to you soon”, “₅₎ I'll 報告する you how it was” 下線部の、clauseの“核”の部分だけを見ると、日本語のMLに英語のELが挿入されているのはひとつで、後は、英語のMLに日本語のELが挿入されているものが、4つあります。挿入されているELは、me (代名詞の目的格)、little (形容詞)、大学の(名詞+所有を表す助詞)、また (副詞1)、報告する(動詞の終止形)といったもので、Myers-ScottonのMLF / 4M modelで見ると、1), 2), 4), 5)に関しては、MLには、内容語と機能語の両方が使われ、ELには、内容語のみが使われるという原則があてはまります。3)については、ELの中に、機能語も使われていて、EL islandという形になっています。2)~5)の例文の枠組みを図で表すと次のようになります。clause単位で細かく見ていっても、原則にのっとったCSのパターンが見え、“むちゃくちゃ”ではない、ということが言えそうです。次回に、この各例文をもう少し詳しくみていくことにします。



■ 学年だよ！

● 中部部 1 年生

Welcome

Mark Avery

7-1 HR teacher, English

I would like to congratulate all the new grade 7 students on a great start and extend a big welcome to everyone. The help the grade 7s settle into their new school, the grade 8 students organized school tours and a welcome party. The grade 11s also welcomed the grade 7s by going to homerooms and making friends with them. This means the grade 7s have older students to talk to and ask questions to. Thank you to both grades for making our new start so much easier.

A Good Start

It has been wonderful to see so many eager faces in the morning. We have not had any problems with lateness. The students have all begun very positively. I have seen a few yawns in morning homeroom, but generally everyone looks wide awake and ready to start a new day. I hope the students will continue to prepare for the next day by finishing homework early, getting a lot of sleep and having a healthy breakfast in the morning.

Adjustments

Being in an environment that does not have specific rules is one of the difficult adjustments students here have to make. It is very important that our students understand the five respects: respect for the environment, learning, self, others and leadership. For this reason, the students meet once a week with Mr. Osako for a lesson about the five respects. Some aspects of the five respects are very difficult for grade 7 students so it would also be very helpful if the students had the chance to talk about their understanding at home.

Coming up...

A Parent's Meeting

I would like to hold a meeting for the parents in May to enable teachers and parents to exchange information about how the students have settled in to their

new school and new routine. It will also be a chance to discuss issues that arise between now and then. In the meantime, it is very important that we work together to help the students to establish good patterns. We need to make sure that they are taking care with their homework, packing their bags carefully either before going to bed or in the morning, asking questions in class when they do not understand something, reading at home and thinking about what they are learning at school. Encouraging these behaviors will help each student to attain the maximum benefit from each day.

The School Festival

One of the biggest events at our school is the School Festival. Each year the students work very hard to prepare their stalls and it is a great opportunity for them to work as a member of a team and develop new skills. The theme this year is "Holidays and Celebrations" which gives the students a lot of scope for original and creative ideas. I am already looking forward to seeing what the students will be able to do. We also look forward to seeing you there.

Finally...

Please keep an eye on the grade 7 homepage for more information about activities the students are involved in and upcoming events. Here is the link again.
<http://www.senri.ed.jp/sis/classof2010/>

● 中部部 2 年生

Not the Youngest Anymore!

Rodney Ray

8-3 HR teacher, English

Now that a new year has started, one of the biggest changes the new 8th graders are experiencing is they aren't the youngest students at SIS anymore. Now there is a whole new group of 7th graders at school. That means that in the hallways, in clubs, in the cafeteria, and even in some of their classes, 8th graders can see new younger students who are experiencing the same excitement and confusion that they themselves experienced a year ago.

One thing that we hope the new 8th

graders will keep in mind is that while they see the new 7th graders, the 7th graders are looking back at them. As "senpai", the new 8th graders are models whom the 7th graders will watch to learn about expectations of behavior in and out of class. This means that the 8th graders have a responsibility to model the kind of behavior that makes a good SIS student. As 8th graders, you know more about the 5 Respects and how to apply them to your daily life. You've been told before that your behavior has effects, not only on yourself, but on the people around you. Now that you are "senpai", this is more true than ever, because you yourselves are becoming leaders in a very important way.

Leadership can be a heavy responsibility, because it means that you have to hold yourself to a higher standard than when you were in 7th grade. On the other hand, responsibility means "ability to respond"; in other words, you can make a difference in the school. By leading through example, you can help every day to make the school better. Please take this responsibility seriously. Respect for Leadership does not only mean following others; it means taking the leadership position yourself when it's your time to do so.

So help the 7th graders, when you see that they need help. A friendly word in the hallways, or useful advice about the lunch menu, can really help them have a better day. But more than that, remember that you are leading every day by your example.

● 中部部 3 年生

自分で自分に機会を与える

田中憲三

1 組担任、数学科

この 4 月に佐野総理さんを迎え、59 名の学年集団としてスタートしました。そしてこの学年を 1 組田中（数学）、2 組難波フランス先生（英語）、3 組野島先生（社会）という新メンバーで担当いたします。どうぞよろしくお願いいたします。

9 年生は本学園ではハイスクールの生徒として扱われます。そして今まで

以上に活動の範囲もぐっと広がります。さらに実り多き学園生活にするためにも、「自分で自分に機会を与える」ことを考えてみて下さい。以下はそのためのヒント集です。

・自分のやってみたい活動（クラブ、生徒会、オール スクール プロダクション等）に、参加してみる。いろいろな人（先輩、後輩）と知り合えるきっかけにもなります。

・自分の興味のある分野について、先生にアドバイスをいただきに行ってみる。そのテーマについてとことん追求してみることによって、その道の専門家になった先輩もいます。

・今やっている勉強で質問、疑問が出てきたら担当の先生のところに行ってみる。個人的に質問に行くと、本当に懇切丁寧に教えて下さいます。

・学校内外のボランティア活動に参加してみる。（学外の場合はお家の人と相談してからね）優しい気持ちになれます。

「自分で自分に機会を与える」ために今必要なのは、ちょっとした勇気だと思います。がんばってください。応援しています。

P.S. 中学2年生の時に、学園祭で得た利益10134円ですが、寄付先としてみんなで決めた団体、UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）に送金いたしました。ここに報告しておきます。

●高等部1年生 ごろごろの勧め

木村典子

1組担任、国語科

4月2日、新高一生86名は入学式を迎えました。この中には外部からの入学生が19人います。内部生は「歓迎コミティー委員会」を設け、オリエンテーションから行動をともにし、入学式後には歓迎パーティーを開催し、少しでも早く学校になじんでもらう努力をしていました。その効果はあったでしょうか。まだ数日しか経っていませんので解りませんが、担任団でも気を付けて見ていきたいと思っています。

今年もこの学年は昨年同様、クラス単位ではなく学年単位で考えて成長できればと願っています。私もクラスの

垣根を越えて注意しますので、覚悟していてください。

昨年この時期のインターカルチャーに、私は「一人でいることの出来る人」になってほしいと書きました。本当の意味での個人主義が解る人になって欲しいと思ったのです。今年はもうひとつお勧めします。それは、「ごろごろの勧め」です。あなたたちは忙しすぎるほどスケジュールを入れていませんか。暇である事に罪悪を感じている人がいるように思います。私は暇である事は大事なことだと思います。時間があればこそ、物事を考えたり悩んだりします。悩みや考えのないところに成長はありません。今の世の中、考えない人が増えているように思うのです。

意味のないことで動くより、時間を作ってじっくりと考えてみてください。今の自分が見えてきます。その自分に納得がいきますか。自分で自分を誉めてやれますか。ごろごろしながら、今の自分を見つめてください。大事なことは、一人でごろごろすることです。友達とごろごろは一番いいかもしれません。

●高等部2年生 ばらばらのすすめ

田中 守

1組担任、理科

僕がカフェテリアで一人食事をしてしていると、必ず生徒の誰かが声をかけてくれます。やさしい子達だなあと、とってもうれしくなります。みんな決まって聞いてくることは「どうして一人で食べてるの？」僕はカフェテリアでは一人で食べるのが、実は大好きです。それはいろんな生徒と話ができるから…。もし僕がほかの先生と一緒に食べていたら、生徒はだれも声をかけてくれないからです。

新田次郎の小説に「孤高の人」という山岳小説があります。加藤文太郎という実在の人物の話で、非常に優れた登山家でしたが、いつも単独で登る人でも有名でした。たった一人で困難に立ち向かう中の葛藤がリアルに描かれています。幕末に活躍した坂本龍馬はふつうの人とは違うものの見方をする変わり者でした。鎖国が解かれ日本に

やってきた外国人を排斥する運動（攘夷）に賛成する人が多数であったとき、彼はひとり外国との貿易や交流によって日本が強くなるのが大切だと考え行動しました。彼はその後、世界でも非常にまれな無血革命といえる明治維新に大きな貢献をします。仏教の創始者ブッタは、人生の意味を捜し求めるために、王子という身分を捨て一人、修行の旅を続けます。現在のインド・ネパールの国境付近です。彼が残した言葉は「ブッタの言葉」という本にまとめられていますが、その中で彼は「ただ一人歩め」と言い続けます。吹田の民族学博物館の初代館長だった梅棹さんは「地球時代の日本人」という本の中で、日本人の旅についてこんなことを書いています。江戸時代に「おかげまいり」という村の仲間とお伊勢さんにお参りする旅行が流行りました。それが後の修学旅行の原型となり、そして今バックツアーとして受け継がれている。同じ習慣や文化を持つ者だけで構成された共同体（村）がそのまま移動し、異郷の違う文化に大して触れることなく、見物だけしてまた「村」に帰ってくる。しかし宮本武蔵のように一人で旅をすれば、まともに異文化に触れなければならなくなり、非常に多くのことが学べると。

11年生はいよいよ学校全体のリーダーシップを取って行動することが求められる立場となりました。学園祭も控えています。そしてスポーツディ。学年旅行も近づいてきます。仲間との共同作業がこれまで以上に求められます。でも、それは決して肩を寄せ合い気を使い合うことではありません。独立した責任ある一人の人間として、自ら判断し、決断し、行動できる。そんなばらばらの、しかし力強い個人が、ある時ある目的に向かって力を合わせることができたなら、その瞬間にもすごいパワーを出せるのです。決して群れることなく、誰かの指示を待つだけの人ではなく、一人の人間としての力をつけてほしいと願っています。そしてその先には、自らの人生の方向を決める「決断の日」がやってきます。

● 高等部3年生

On Beginning the End

Mary Pfeiffer

12-3 HR teacher, English

Welcome to grade 12! On the morning of this year's entrance ceremony, I mentioned to my homeroom that the next time we would all gather in the gym for a ceremony, it would be your graduation. The looks on faces turned grim. Wanting to inspire, not dampen spirits, I continued, "I know it's sad, but I want you to think of all you will accomplish between now and then. If you let your mind wander during the ceremony, I want you to think of all those goals you have. Think of your goals and how you will get there. Plan your path."

It is scary, this beginning of the end. It is scary and sad ... and wonderful, if you want it to be. I have been thinking about a quotation--and I plan to hang it up in homeroom this trimester--"A pessimist sees the difficulty in every opportunity, but an optimist sees the opportunity in every difficulty." Please think of this when you face the University Mountain ahead. Think of what would be the ultimate last year of high school for you, what classes, activities, school events, social things you want to contribute to and experience. For example, next month is your last School Festival, so let's all do what we can to make it memorable and gratifying.

We homeroom teachers will be holding student interviews this trimester, in which we discuss what you plan for your last year at SIS, what you want to accomplish in the coming trimesters, and how your university preparation is going. We look forward to spending time with each of you and helping you in any way we can.

Finally, we would like to welcome four new students to the class: Hiroyuki Takenaka from Canada; Misuzu Otani from Italy; Megumi Nakarai from London; and Yuka Kimura from New Zealand. We also want to welcome back Senjun Tsuda from a year in the Philippines. We hope you all have a fulfilling year.

週刊「ダイヤモンド」掲載

雑誌「週刊ダイヤモンド」(4月5日発売)の特集「息子・娘を入れたい学校」で本校が掲載されました。その内容を少し紹介すると、「学校選びの新基準」の「進学塾が選ぶ目的別お薦め校」の記事中、「国際感覚を身につけさせたいなら」という目的で「関西では千里国際学園の評価が高い」とあり投票数で1位になっています。また「少人数できめ細かい学習指導を望むなら」という目的でも本校の名前が挙がっていました。

5月4日“高槻Jazz Street”出演

福島浩介

国語科

今年も千里国際学園のJazz Bandが高槻Jazz Streetに出演します。場所/時間は、高槻市役所南側駐車場5月4日16:00~です。大勢の皆様のご来場をお待ちしております。地図はこちらを参照してください。
<http://www.senri.ed.jp/temporarily/takatsukijazz.htm>

1500m走で学園歴代2位記録

馬場博史

ランニングクラブ・トライアスロンクラブ顧問、数学科

■吹田市長杯陸上競技大会

4月18日(日)吹田市総合運動場で恒例の春季吹田市長杯陸上競技大会が開催されました。この大会の参加資格は吹田市在住在学在勤ですが、過去の実績から吹田市陸上競技連盟より参加を認められているものです。今回本学園から6名が参加。うち花光照宗君(SIS9)が1500m走で学園歴代2位となる4'45"の好記録を出し、最も参加者の多い中学男子の部で第3位に入賞しました。＜他の参加者＞小学男子1000m 6位Kento Saito-Baba(OIS5)、中学男子100m/200m清水航(SIS9)、中学男子1500m古岡祐輝(SIS9)小澤悠(SIS8)、高校男子1500m 1位溝口智顕(SIS10)

■トライアスロンクラブ・ランニングクラブ新入部員募集

トライアスロンクラブは月木曜Run&Swim火金曜Run&Bike(16:00-17:30)、水曜Run(16:00-16:45)の練習をしています。ランニングクラブはこのRunの部分のみ一緒に練習します。速い人ものんびりの人それぞれでペースで楽しくやっています。中には日本トライアスロン連合(JTU)近畿ブロックの指定強化選手という強い人もいますが、フィットネス感覚で気軽に参加する人もいます。顧問はこの4月から大阪府トライアスロン協会の理事を務め、普及活動に微力を注いでいます。他のクラブを兼ねることもできますので、興味のある人はぜひ一度体験に来てください。

「木の芽時」

進路情報室便り

見島直子

進路情報室、国語科

最近の言葉から。

「俺はよくゴルフをやる。ゴルフ、楽しいね。モットーは「やるなら真剣」。遊びでも本気でやれば、心底から楽しい。真剣に取り組むからこそ、本当の喜びがそこに存在する。仕事もそうだし、生きてゆくことも同じ。気の入らない見せかけの努力は、結果もそれなりだ。」（中村雅俊・俳優）

「若いうちは迷うものなのです。常に意志をもって、切り開かなければなりません。楽な道などないのです。ただ、迷いながらも決めたら全力疾走で3年は突き進むべきでしょう。本気で取り組み、面白いことや感動することが必ず出てくる。大切なのは、進路や自分の将来で迷っても、人に判断を頼らないで、苦しくても自分で考え抜くこと。人が指し示した方向へ何とな

く歩いていってもワクワクする日々は訪れないと思う。自由に自分で決める。そして責任も自分で取る。周囲の人間にできるのは、納得するまでやれと励ますことだけ。自分の限界を見極めて、あきらめるのも自分です。」（安藤忠雄・建築家）

活躍の場は全く異なるお二人の言葉ですが、内容はとてもよく似通っています。あなたはこれらの言葉を「厳しい」と感じますか。厳しいと言えば厳しいかもしれませんが、でもその「厳しさ」にはぞくぞくするような魅力も同時に感じませんか。それぞれの分野の第一線で活躍されているお二人が語る共通のキーワードは「真剣」「本気」。体裁や、約束された結果など求めない「真剣さ」「本気」が、「本当の喜び」や「ワクワクする日々」をも

たらすと言っています。

みなさんは、人生の「木の芽時」にいます。迷いながら、不安にかられながらも、芽を出して伸びていく時期なのです。自分と真剣に向き合い、自分に正直に、そして自分を信じて、「本気になれるもの」を探してください。

あなたがた一人一人が自分の進路を自分で考え抜くために、進路情報室や教員に出来ることがあれば、喜んでお手伝いしたいと思います。

自分の身体を大切にしていこうね

保健室からみんなへ

弥永千穂

保健室

新入生のみなさん、編入生のみなさん、そろそろ千里国際学園になれてきましたか？毎日楽しく過ごすには心と身体の元気が必要です。中学、高校をとおして自分の健康（心と身体）を管理していけるようになってもらいたいと思います。自分の生活スタイルや環境は心と身体の元気に関わっています。しっかり寝ること、食べることがまずは基本。身体の元気になります。心の元気は、ひとりではかえこまない、話す相手（友達）を作る、自分の好きなことにチャレンジしていく、自分スタイルのストレス解消法をみつけることなどが助けとなります。自分の身体を大切にしていこうね。保健室は学校でけがをした、気分がわるくなった時以外にも病気や性のことで悩んでいる時に利用してください。朝8時から12時15分まで午後は1時から4

時45分まで開いています。できるだけ授業に遅れないようにうまく利用してください。どうぞよろしくお願いいたします。

保護者の方へ

保健室を利用する生徒の中には精神的にしんどくて身体がサインをだしていることもあります。保健室では身体をケアしながら生活のアドバイスをするとともにいろんな話の聞き役になるようにしています。栗原先生へ面談をお願いしていっしょにサポートするケースもあります。子供たちが心も身体も元気で学校で過ごせるためにご家庭での生活のリズムを整えてあげてください。そして朝は笑顔で送り出して、毎日子供たちの話を聞く時間をもっていただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

千里国際学園図書館へようこそ！

青山比呂乃

図書館

新入生、編入生のみなさん、保護者のみなさん、入学おめでとうございます。そして図書館へようこそ！図書館は、学園の玄関を入った直ぐ目の前です。現在蔵書は、日本語約29,000冊、英語約25,500冊、合わせて約54,500冊です。新聞は日刊紙だけで、日4タイトル英3タイトル、雑誌も寄贈・購入、日英合わせて、130タイトルくらい、2階のマルチメディアフロアには、ビデオ・CD・CD-ROMなどのニューメディア資料も1000点以上あって、空き時間にはヘッドホンを借りて視聴することができます。

図書館は、授業のある日はいつも、朝8時から夕方4時半まで（マルチメディアフロアは、8時半から4時まで）開館しています。機会がありましたら、保護者の皆さんもいつでも訪問してください。保護者の方々が読書にいい姿勢は、生徒たちにも良い影響を与えたいと思います。この図書館では保護者も登録すれば本を借りる事ができます。ただし、利用規則は生徒と同じで、生徒の利用に支障のない範囲に限られます。詳しくは、お気軽に図書館までお問い合わせください。

なお、図書館には今2名の司書教諭（ワット・青山）と4名の図書館スタッフ（木下・川端・宮本・ダッタ）が働いています。図書館スタッフは司書として毎日働いていますが、1日中ではなく時間で交替しています。

* 模様替え

図書館2階にあったビデオ視聴用キャレルデスクを4台、普通のデスクに改造して、今まであった1階の8台のデスク脇にまとめて置きました。もうすでによく使われています。

そして、2階にあった低書架を1台、1階日本語参考図書エリアに移し、2階には、新しく普通の高さの書架を入れました。いままで、1階と2階に分散していたニューメディア資料の置き場

所を整理して、わかりやすくする予定です。2階には、ビデオ・CDなどと、進路資料、英語検定などの問題集、語学教材などをまとめて置き、すぐ横のマルチメディアラボやビデオなどの視聴覚キャレルで見やすくなるでしょう。今までどおり、個人が自由に勉強に使えるキャレルデスクも4席用意しています。

* 蔵書点検報告

蔵書点検は、生徒ボランティアを募って毎年恒例となっています。今回は、3月15日16日に日英すべての図書の点検をしました。今年は、前年度までのベテランの人たちがほとんど卒業してしまったので、どうなるかと心配していたのですが、15名の中学生と4名の高校生（現学年のGr8: 3名Gr9: 6名Gr10: 6名Gr11: 4名）、そして、6日に式を済ませたばかりの卒業生2名も加わり、総勢21名が汗を流してくれました。

半日だけの人も丸2日の人も、ベテランの上級生も初めての人も、本当にとても良く働いてくれて、毎年約2千冊づつ増えている本のデータをすべて入力し終える事ができました。今回は、初めて、PCをたくさん動かす方式に変えましたが、みんなばっちり働いてくれて、例年より1時間くらい早めに終わらせることができました。ボランティアの皆さん、本当にありがとうございました。お疲れ様でした。

その結果の昨年度分の行方不明の図書リストは、現在最終チェック中で、次のインターカルチャーで報告します。皆さん、教室などで誰も借りたかわからない、図書館のラベルのついた本を見かけたら、是非、図書館へ持ってきてください。誰かがなくして、必死で探している事がありますので。（ちなみに本をなくすと、弁償する事になっています！）

* 日本語図書 歴代貸出記録

ここ数年のインターカルチャーで、日本語図書最多貸出記録の報告をして

います。今回は、第1位の記録が破られる事はありませんでしたが、3月に卒業した学年の3位までと、今までの歴代の記録を御紹介します。

2004年3月卒業生 日本語図書最多貸出記録（4-5年間に在籍）

1位：有田 梓さん 305冊

2位：芦田 佳子さん214冊

3位：野村 岬さん 205冊

1997～2004年歴代卒業生 最多貸出記録

1位：2002年 刺賀蘭里さん 1043冊

2位：2002年 新井隼子さん 445冊

3位：1998年 沼田貴範くん 376冊

4位：2003年 角田 瞳さん 346冊

5位：2001年 松宮寧子さん 328冊

2003年 伊藤 愛さん 328冊

6位：2004年 有田 梓さん 305冊

7位：1999年 井上愛子さん 302冊

8位：1997年 廣瀬裕紀子さん291冊

残念ながら、コンピュータシステム上の違いから、英語図書の記録はありません。図書館に読みたい本使える本があったとは限らないし、借りたから読んだというわけでもない。みんな在学期間も違うし、英語ならたくさん借りたのに！という人もいます。そういう意味では、簡単には誰が一番とは言えないのですが、一つの記録として参考まで。

ちなみに有田さんは5年間の在籍でしたが、この数字を出しました。皆さんもどんどん借りてせっかくの図書館を愛用してください。

Marist Brothers Model United Nations

Mark Avery

SIS MUN Teacher, English

In March, the SIS Model United Nations (MUN) class spent three days at Marist debating a grand total of 11 different global issues. Here is a list of the students who attended and the countries they represented? Masahiro Miyamoto CONGO, Tina Maran and Ayumi Takashima RWANDA, Alisa Koyama GEORGIA, Takahiro Nagao PAKISTAN, Mao Ikenaga FRANCE, Naoko Kaga and Aya Waterhouse UKRAINE, Miki Watherhouse, MALTA, Masako Tanaka and Rikako Sano SAUDI ARABIA, Meguru Nakaya and Chiaki Fujita COLOMBIA and Chisato Sakai SURINAME.

Preparing for the conference was a real challenge due to the number of topics that were on the agenda. The meeting was made even more complicated by the Iraq war which divided opinions amongst countries that normally have good relations. However, this also ensured a very lively debate. I'm sure all the students will remember the U.S.A delegate's proclamation that even if the resolution

calling for a ban on weapons in space was passed, the United States would simply ignore it. The debate was a little slow on day one but incidents such as these and the emergency crisis on the third day encouraged all the delegates to fire up and become involved. Taka was sitting there, quietly enjoying the debate when a news flash came in and the floor was informed that the president of Pakistan had been shot. Suddenly he found himself at the centre of the debate. I was delighted. It is unfortunate that with almost two hundred students participating in the meeting that voicing opinions was very difficult at times. There was some wild placard waving going on in order to capture the attention of the president.

As a teacher watching the meeting, I felt very proud of all the students for the effort I know they put into preparing themselves for the meeting and for their level of participation. Even if their voices could not always be heard, I could see they were paying close attention to the debate. They were appalled by the absurd statements of some delegates and overwhelmed by the persuasive powers of others. They were

always engaged in the debate and from their own responses, I know it was a special experience for them.

I would like to congratulate Aya for doing an excellent job as Day One President. Her opening speech to the floor invited all the delegates to work together to find solutions to the agenda items and cooperate in the spirit of the United Nations. Mao also did a wonderful job as President of the European Regional Meeting on day one. The discussion in the European room flowed smoothly and produced an effective resolution that was finally passed. Finally, congratulations to Alisa Koyama for receiving an Outstanding Resolution Award for her resolution addressing the issue of soil erosion. Congratulations to all the other participants in the course for not only rising to the challenges in the course, but for gaining everything they could from the experience. The way they participated in the meeting and quickly established good working relationships with other delegates demonstrates they understand the meaning of diplomacy.

情報科の授業から

合志智子

情報科

情報科では、7年生の「コンピュータ基礎7」でタイピングやWord、PowerPointなど基礎的な学習をし、9年生以降では、コンピュータグラフィックス、ホームページ作成、オリジナルTシャツ製作、コンピュータによる作曲、ゲームプログラミング、LEGO MindStormsを使ったロボット製作とプログラミング制御など、いろいろな分野の取り組みをしています。2003年度に実施した授業での作品を、当学園のWebページに掲載しました。トップページ→各教科→情報→Classから、どうぞご覧ください。



Splash Power Stageに参加して・・・

岩村春奈

高等部2年

先学期に水口先生からSplash Power Stage (S.P.S.) のスタッフとして参加してみないか、という呼びかけがあった。去年のS.P.S.に参加した人の話を聞いていて、楽しそうだなと興味を持っていたので、最初はなんとなく、軽音部だしという気持ちで参加することにした。(このS.P.S.というのは箕面市の子ども課主催のもので、箕面市内にある学校の高校生が集まり、高校生による高校生のためのステージを作っていくものです。)

最初のミーティングは冬休みに入っ
てすぐに行われた。ミーティングも本
番も全て「らいとびあ21」という箕
面市の市民会館のような所で行われ
ました。その第1回の会議に集まった
のはたったの4人だった。その4人は
実行委員のトップ2人と12年の福地
君と私だけだった。二人は経験者で
もあるのだが、その時は全く先が見
えないままスタートした。「SPLASH
POWER STAGE」というのは、「水がは
じけるようなパワフルなステージ」と
いう意味を持っている。その言葉を
基本にして話し合いをした。それか
ら週に1回あるいは2週に1回のペース
で会議が行われた。3回目の会議にな
ると最初は4人だったメンバーがあ
ったという間に15人ほどにふくれあ
がった。もちろんメンバーは全員現役
の高校生で、何故参加しようと思った
のかと聞いてみると、「新しいことをや
ってみたい。」「他校生と触れ合い
たい。」「イベントごとが好きだけ
ど作っていくのはめったに出来ない
から。」というのがほとんどだった。
メンバーが増える事で、何をしない
といけないうのか、どうすれば良い
のかが徐々に分かっている、そして
一人一人自分が出来るような仕事
(本部・音響 福地君・照明 てっぺい
・広報 春奈・舞台・飲食)に分か
れて話し合いをし、作業にとりか
かった。その段階ではまだ、お互い
のことをあまり知らなかったの
でギクシャクしながら作業を行っ
ていた。

それから、出演者を募集し出演者へ

の説明会を開いた。もちろん出演者も
高校生で、ダンスとバンドの部門が
あった。みんな練習はしているもの
の披露の場が無い、または大会やラ
イブハウスを借りてやるお金がかか
る、でもS.P.S.なら無料で出来る
というので集まったのだろう。その
集まった数は17組だった。私達は
こんな数全て出来るのだろうか？と
いう不安もあったが、せっかく応募
してくれたのだから全組出演させよ
うと決めた。(その17組の中にSIS
のミノクロ・WEEKEND・Black
Velvet・Server Down・Sachem・
Sports DEPOの6組のグループが出
演してくれました。)

前日になるとメンバーの顔はいつ
もとは違う真剣な顔つきで看板を
立てたり、バンドのリハーサルをし
て音の確認などをしたりしながら「
明日が本番なのか～実感が無いな～
」と言い合いながら作業をしていた。
その日は作業が終わっても、興奮し
ていたのか皆なかなか帰らずに、
今まであった話をしたりとふざけ
合ったりもしていた。そしていよいよ
当日の3月31日。12月から集まり
約4ヶ月何度もミーティングを重ね
て作ってきたものをやっと完成させ
られる時が来た。朝の8時に集ま
ったメンバーはイキイキとした顔
でダンスのグループのためのリハ
ーサルを待っていた。10時半出演
者ミーティング、スタッフ最終ミー
ティングを行い後は客を待つだけ...
。11時半開場、その時ほとんど客
はおらずほとんどが出演者だった。
12時開演！みんなのいままでの
努力を発揮する時が来た！ワクワク
とドキドキと不安の気持ちを抱え
ながら「S.P.S.2004」が始まった。
ダンスのグループが始まり、入り
口では手作りのパンやジュースを
売り、調理室ではそのパンを休むこ
となく作り、舞台の袖ではMCと音
響が次のチェックを入れ、会場の隅
で照明が雰囲気を作り出すために様
々なライトを照らし、音響は音が
客席にちゃんと届くように調整し、
タイムキーパーは時間を計り次の
出演者を呼びに行く...。スタッフ
がそれぞれ自分の仕事でバタバタ
と動いていた。ダンスとパン

ドの合間に20分の休憩があったが
私達には休みなど無かった。だから
と言って、皆の顔が疲れた様子でも
ない様子でもなく、むしろ皆の顔は
イキイキとしてとても楽しそうだ
った。

そして全ての出演者の演奏が終
わったのは7時頃だった。その時の
達成感と嬉しさは私にとって(皆に
とっても)とても大きいものだった。
でもそこで全てが終わった訳では
なく、私達には片付けが残っていた。
皆嫌がらずに片付けを楽しみなが
ら出来るぐらいにテンションが上
がっていた。そしてスタッフから頼
んでもいないのに、出演者の方
々がゴミ拾いの手伝いをして
くれて、「何かする事ありますか？」
「お疲れ様でした!」「有難うござ
いました!」と言って貰えた時は
とても嬉しくて「やってきて良か
った!!」と心の底から思う事が
出来た。それから、飲食の子
達が残った材料で賄いを作
ってくれ、みんなで食べて成功
してよかった～っとワイワイや
り、その日解散したのは11時
近くだった。

私は本当にこのS.P.S.に参加
して良かったと思う。最初はSIS
と違う学校の人達とうまくや
っていかれるのか心配だった
けど、そんな心配をする必要
などなかったなと今は思える。
そしてまた、このS.P.S.の
スタッフとして関わる事で学
んだことや、得たものがた
くさんある。それは、自分の
意見を言う事そして聞くこ
とがどれだけ大切な、何か
一つの大きなものを作り
上げていくにはメンバーの
チームワークが一番大切だ
と言うこと。他にもたくさん
あるが、もっとも大事な
のはこの二つだと思った。
誰かが休んでしまえば
その穴を埋めるのも大変で、
また休んだ方も自分の
いなかった分進んで仲間
にはいれなくなってしまう。
そこですれ違いや衝突が
起きてしまう。私達も約
4ヶ月間、意見のすれ
違いや衝突、または仲間
割れみたいのがあった
が最後には一つの「チ
ーム」になっていた
と思う。そしてSISの
生徒と他校生の違い
にも気がついた。SIS
では自分の意見を
抑えず出し合い、その
中でまた話し

(次ページ★に続く)

新・生徒ラウンジ！！

梅本友美

HS生徒会、高等部3年

こんにちは。皆さんもお気づきかと思いますが、この春、生徒ラウンジが新しくなりましたよね。これはただ単に大迫校長先生が“生徒の人数が増えるから”私たちにプレゼントしてくれたのではないのですよ。

これに至るきっかけは？ HS生徒議会のクラレブで頑張って下さったみなさんです。去年議会では、学校のゴミ問題（特にカフェテリア・生徒ラウンジでの）・マナー問題について話し合いを重ねていました¹。あるとき、各クラスに「ゴミ・マナー問題の解決策」について意見を募ってもらいました。その意見の中にあつた、この一言『そんなHSだけで話し合っても解決しーひんやん。』この一言が「じゃあMSも一緒に考えていこう！」に繋がっていったのです。（ちゃんと意見が反映されていくのですね♪）

そして、今回の主人公、MS生徒会とMSクラレブ、協力してくれたみなさんの登場です。「生徒ラウンジを自分たちで作っていくことで、自分たちの場所にしよう！」というプロジェクトが始まりました。目的は、自分たちで手を加えていくこと→その場所を大事に思う→先程のゴミ問題を解決！です。最初はカフェテリアに長年勤めていらっしゃる合志さん（お馴染み、カ

フェのおばちゃん）のお話を聞きに行ったり、生徒ラウンジの机の配置・どんなラウンジにしたいか？等のイメージを描いたり、アンケートをとってくれたりしました。

最終的に、「ラウンジの机・イスを作ろう。」ということになり、まず試作として1セット作ることにしました。皆でコーナンまで材料を買いに行き、一人一本ずつ木材を運び（はたから見ると不思議な集団でした。）、1セット完成を果たしました。（現在化学室前に保管中。そのときのビデオも撮ったので、編集後MMTVにて放映します。お楽しみに。）ラウンジに置くにはまだまだ数が必要なので、今後作っていくつもりです。私の提案としては、今年4月からの新HS生徒会に引き継いでもらい、OISとSISの交流の場としてこの製作を試みてはどうか？と只今生徒会にて思索中です。とにかく、短期間のイベントとしてではなく持続的に行動していけるものにしていこうと、先の問題は改善されていくのだと思うことから、今後に繋げていきたいです。

また、現在の生徒ラウンジの机・配



置は、先程のMSの生徒達がラウンジの改善イメージを描いたものを総合して一つの未来予想図にしたものをベースに作られました。（木目の方が温かみを感じられ良い、カウンター形式の方がたくさんの人が座れる、などもです）

このような、MS生徒会・その仲間たちの努力と、それに対する学校側のサポートが影にあり、現在の生徒ラウンジがあります。是非、皆さん、大事に使ってください。また、これを読んでいらっしゃる保護者の方々、この場をかりてお願い申し上げますと、この問題について、一言でもいいのでお子さんに声をかけていただきたいと思います。ご協力よろしくお願いします。ありがとうございました。

1 アイス・菓子類のゴミ放置、カフェの食器を洗い場まで持って行かず置きっぱなし、床に座って食べる。etc

（★前ページの続き）

合っていくというのがどの授業や活動でも見られるので普通のように感じるが、他校ではそれがとても難しく大変なのだな思った。それはSISと他校の教育の違いを感じた一面でもあった。そして、今の高校生は学校生活とは違う何かに挑戦してみたい、また自分の練習の成果を発揮したいという気持ちを抱いているというのがS.P.S.を通して分かった。だから、これからもこういった活動を行っていくべきだな、と

私は思った。

このS.P.S.を「成功」出来たのは、皆の協力・努力の結果です！！そしてこの主催の子ども課の方々が私達の無理な願望を許してくれたのと陰での支えがあったからこそです。何をすることも私達だけではなく影での支えや応援があるからです。本当に感謝しています。そして出演してくれた皆さん、当日ボランティアで来てくれた12年の新見君、11年ののぞみ（照明）本当に助

かりました！ありがとう！そして卒業生のモロさん、川瀬さん、2人が居なかったらこんな素敵な物には成りませんでした。有難うございました。本当に参加してよかった！このインターカルチャーを読んで、少しでも興味を持った方は次にある夏のS.P.S.に是非参加してみてください。絶対良い経験、また学校とは違う楽しさが味わえると思います。

学年パフォーマンス大会を終えて

新見眞史

高等部3年

11年生の冬学期、我々は自分達の学年を対象とし、パフォーマンス大会なるものを企画した。以下は、そのイベントの記録である。なお、～当日の様子～の項目は、南川朱生によるレポートである。

～隠された真の狙い～

「来年はもう受験生だから、最後の思い出作りにパフォーマンス大会を開催したい」私（新見眞史）が提出した企画書は、イベントの目的を上記のように述べていた。A4サイズの紙上半分を使い長々と書いたのだが、要約するところのような内容だ。私はこの企画書を先生に提出し、各クラスに掲示してもらった。イベントを開く、本当の目的を伏せたままで・・・。

「思い出作り」という理由も嘘ではなかったのだが、このイベントの目的は別にあった。所謂「自らへの挑戦」というやつである。我々は2人とも、長い間生徒会役員を務めてきた。今までの生徒会活動の中で培った「イベントを企画する力」を、どこまで発揮することが出来るのか、試してみたくなったのだ。何かを企画する上で、一番重要になってくるのが準備である。今回は「準備を完璧に」というのを念頭に置き、話し合いを始めた。入念な打ち合わせ、各出演者との面接、分刻みのスケジュール……。これらの綿密な準備により、このイベントを「芸術」と呼べるまでに、完璧且つ美しく（←これ重要）成功させること。これが我々の最終目標であった。我ながら物好きなことである。実はもう一つ目的があったのだが、それについては後程述べることにする。

～面接～

パフォーマンス大会には8組のグループが出演したのだが、我々はそれぞれのグループ全てと面接を行った。これには大きな理由がある。当たり前なことだが、出演者は準備や後片付けといった当日の流れを把握する必要がある。そのためにミーティングを開くのだが、真剣に話を聞かない人という

のがどうしても出てくる。今言ったらかりのことを聞き返してくる者、隣と喋りだす者、携帯の画面を一生懸命見ている者……。それは仕方が無いことと済ませてしまうのは簡単だが、それでは我々の当初の目的に反することになる。そこで多少の手間はかかるが、一人ずつと話せる状況をつくり、それぞれときちんとした話し合いをすることによりこれらの問題を解決しようと試みた。さらに「面接」と言う言葉を使い、適度の緊張状態を話し合いの場につくることで、出演者がより真剣に話を聞くように仕向けた。出演者と言う立場は、自分達の行うパフォーマンスに熱中するあまり、自らに課された責任を忘れがちである。この「面接」は責任感を強く持ってもらうことも目的としていたため、真剣に話を聞いてもらう必要があったのである。「面接」では、禁止事項や注意事項、使用する機材、出演の順番、歌詞に不適切な言葉が使われていないか等の確認を、淡々と進めていった。そして最後に「この面接の際約束した事柄を誓約します」といった内容の誓約書にサインをしてもらう。これは私の単なる趣味強く責任感を持ってもらうというのに一役買っている。苦笑いをしながらも出演者たちはサインをしてくれた。約束を破った場合恐ろしい制裁が待っていたのだが、幸いにも今回はそのような犠牲者は出なかった。

～当日の様子～

音響・照明熟練者の手際良さと、学年内のチームワークの良さが一体となり（多少アクシデントのため開始が遅れたものの）万全の準備のもとパフォーマンス大会が始まった。鷹島あゆみさんと村井仁美さんのテンポの良い司会つぱりに、観客の中に笑いが巻き起こる。そんな雰囲気の中で前半、学年が誇る歌姫達のパフォーマンスがはじまった。ピアノやギターの音色と共に、歌い手の力強いメッセージがシアターいっぱいに響き渡り、聴いている人は皆、筆舌に尽くし難い感動を覚えた。

続いて後半のバンドの部では、それ

ぞれの個性を存分発揮したパフォーマンスは勿論、幕間の良さに我々主催者は歌詞チェックも忘れて見入り、聴き入ってしまった。

何よりも素晴らしかったのはこのイベントが当初のスケジュール通りに終了した、ということである。（実はこのイベントの行われる三日前、学年の先生方に「このスケジュールでは無理がある」との御指摘を頂いたにもかかわらず、我々は馬耳東風であった...）こうしてパフォーマンス大会は目出度く幕を閉じた。

～全てが終わり……～

我々の当初の目的であった「自らへの挑戦」は、イベントを無事に終えたことにより達成された。このことは自分たちの企画力の証であり、今後の様々な活動に対する自信につながるだろう。このイベントでは、我々の意図したこと以外にも収穫があった。個人的な見解ではあるが、学年の仲がより深まったのではないかと思う。音響や照明担当者（いずれも同学年）の協力の下、出演者が一体となって1つの物事に取り組んだこと。このことにより絆を深めることが出来たのではないか。我々はそう思っている。

～そして我々が伝えたいこと～

この記事を読んだ後輩の諸君はどう感じているだろうか？「酔狂な趣味を持つ人もいるものだ」多くの人はこう考えるかもしれない。しかし、「自分たちもこんなイベントを開いてみたい！」このように思ってくれる人が少しでもいれば幸いである。それはこのイベントを企画したもう一つの理由、「終わった後に記事を書き、後輩を刺激したい」この目的が達成されたという意味なのだから....。

最期に、このイベントに協力してくれた全ての生徒及び先生方へ、この紙面をお借りして感謝の意を表したいと思います。

<発案・企画>新見眞史・南川朱生
<実行委員メンバー>福地智幸（音響）・米田哲平（照明）・大竹美紗子（機材）
<アドバイザー>井藤眞由美先生・土佐礼子先生

保護者会だより

第9回定例会報告

日時:2004年2月26日(木)13時~15時

場所:会議室

出席者:大迫校長先生 下村さん 4役(三浦 獅子倉 上林 阪口)インターナショナルフェア委員(松原 内田)ボランティア委員(趙 左海)ネットワーク委員(宮本 福住)フォーラム委員(堺谷 福井)広報委員(金江 清水)

1. 校長先生からのお話

23日のネットワーク委員会の地区リーダー新旧引継いでいろいろな質問に直接答えて頂けるはずでしたが、ご不在であったため定例会においてお話がありました。その内容としては、2004年度から、各学年に1人はNon-Japaneseの先生を担任として配属する。単一文化では引き出すことの出来ないいい面をたくさん引き出していく事が出来るという点を保護者には理解して頂きたい。なお、細かい要望もきちっとインプットしてあるので徐々に解決策を考えていく、ということです。

2. 各学年からの報告

*7~11学年まで各学年とも、2月中に懇親会を行い、次年度委員を決定しました。

懇親会が他学年と重なり出席できなかったのも、日程決定に配慮が欲しいという意見ありました。

*12年生は卒業パーティーの準備中、学年委員が卒業パーティー委員を兼ねている。

200名分のケータリングサービスを頼み、他学年の出席もOKの予定。今年度はボランティア委員が手伝う。

<卒業パーティーについて>

今年度は12年生の卒業パーティーはボランティア委員が、9年生の卒業パーティーは8年生の有志及学年委員が手伝う。

入学式後のティーサービスもこういった形であるかを考える必要がある。

3. 各委員会からの報告

*インターナショナルフェア委員会
収益よりOIS・PTAへ70万円、SISへ100万円、SISFへ70万円寄付する事に決定

した。

*フォーラム委員会

1月26日に雅楽コンサートを行い、約80名の参加、子供達の参加もある。

3月1日にひなまつりイベント。お花の講習会の後、シアターでコンサートを開催する予定である。

*広報委員会

3月号の編集集中。卒業特集で4名の保護者の方に寄稿を依頼。インターナルチュア5月号まで担当する。

*ネットワーク委員会

2月23日に地区リーダー新旧懇親会。これからも地区会で出た学校への要望などをすいあげていきたい。12年生がいなくなると人数が減ってしまう地区がある。

* ボランティア委員会

3月6日(土)12年生卒業式でお手伝いの予定(5~6名で)。

* 4役

OISとの懇親会として花寿司講習会をする。盛会で皆様に楽しんで頂けた。今回は4月にOIS側が主催してアルバム作りを予定。

各委員会からの報告後、出席委員の皆様からいろいろと一年間委員会をやってみての反省、要望などざっくばらんに話しあった。

- ・ 新委員と引継ぎをやってほしい。
- ・ フォーラム委員会ではイベントの参加人数確保が大変になってきているので、今後の存続方法を再検討する必要があるのではという意見等が出た。

- ・ 常に家庭と協力しあい学校作りをしていくことを信念としているので、色々出ている問題には一つ一つ整理しながら誠意を持って解決していく。

- ・ 今年度の新しい試みとして大学との提携授業が始まった。大学側からの評価も高い。これがいいものかどうかもちきちと調べ有意義なものは残していこうと思っている。

- ・ 今年度、保護者会の協力で駐車場問題がほぼ100%解決した。

- ・ 次年度の課題として、校内外の公共マナーについて各家庭とも協力して取り組んでいきたい。

- ・ 一年間の委員の活動をねぎらわれた。

2. 各学年からの報告

特になし

3. 各委員会から

今年度の締めくくりとして、報告、感想、次年度以降の活動への提案等がされた。

4. 次年度執行部の紹介

会長:獅子倉

副会長:津高 藤田

会計:吉積

書記:高木(4月に新7年生から1名選出)

4月15日(木)カフェテリアにて新旧引継ぎ会

文責:三浦優子

第10回定例会報告

日時:2004年3月5日(金)13時~15時

場所:会議室

出席者:大迫校長先生 下村さん 4役(三浦 獅子倉 上林 佐野 上田 阪口)インターナショナルフェア委員(松原 木村)フォーラム委員(堺谷 福井)広報委員(金江)ボランティア委員(齊藤)ネットワーク委員(宮本 福住)

1. 校長先生のお話

この一年を振り返って

2003年度SIS保護者会(各委員会・学年連絡係)

昨年4月、戸惑いながらもスタートを切った私たちも、皆さんのご協力を得て何とか無事にこの一年を終えることができました。各委員会・学年連絡係の方に一年を振り返っていただきました。

＜保護者会会長＞

思いもかけず、保護者会会長をお引き受けして一年がたちました。一つ一つの行事を夢中で終えていくうちに、あっという間に過ぎてしまったというのが実感です。本当にたくさんの方に助けていただきました。一緒にお仕事をしてくださった委員の方々、校長先生はじめ諸先生方、職員の方々、そして、いろいろな呼びかけに裏で表で応援してくださった保護者の皆様、本当にありがとうございました。

また年間の抱負として、OISとの交流をあげましたが、OIS・PTAのボードの皆さんにも本当にお世話になりました。

この一年、保護者会の仕事を通して千里国際学園のコミュニティの一員である事に、喜びと誇りを感じる事が出来ました。こんなにたくさんの方々に慈しまれて育つ子供たちは、本当に幸せだと思います。この素晴らしい環境で育つ子供たちが、混沌とした世界の平和を希求して活躍してくれる事を願っています。

次期会長を、副会長として私を支えてくれた獅子倉さんが引き受けてくれます。行動力のある彼女が今年、考えてはいてもなかなか実行できなかった事を実現していつてくれる事を期待しています。

(三浦優子)

《 委員会 》

＜インターナショナルフェア委員会＞

毎年11月に開催され、保護者会主催としては我校のメインイベントとなりつつあるインターナショナルフェア。その大仕事を私達委員の手で成し遂げたなんて、今となっては本当に不思議な思いで振り返るこの頃です。

初顔合わせの日、いったいこれから何が始まるうとしているのか誰一人として知らない、そんなメンバーで、前年度までの資料だけを頼りに手掛けた一つ一つの作業、生徒課の下村さんをは

じめとする諸先生、四役の方々のご協力を得、熱心に参加してくださるボランティアの皆さんのお力添えを支えに、一步一步前進できた二百余日でした。

”インターナショナルフェアには魔物が潜む” 委員同士の協力さえあれば、その力は十倍にも百倍にも発揮される事を実感することができました。本年度の新役員の方々もさぞかし不安を抱えてのスタートとなる事でしょうが、私達の経験した事で良ければ惜しみなく提供するつもりです。誰でもが味わう事のできないあの達成感、私達の特権です。どうぞたっぷり感じてください！

(松原泰子)

＜フォーラム委員会＞

桜が終わり夏の気配を感じる立夏…。日々の流れとはなんと早いものでしょう。

私たちH15年度フォーラム委員会の一年も“あっ”という間でした。

会場、タレントのスケジュール、そして皆様への早めのお知らせ、随分先をみながら過ごしてきました。いつも私たちの行動を温かく見守り、応援し、参加して下さったたくさんの保護者、生徒、学校の皆様に心からお礼を申し上げます。一年間、本当にありがとうございました。皆様の心に触れる瞬間を少しでも作る事ができたなら、フォーラム委員一同とても幸せです。

一年間、委員をして感じた事が二つありました。

一つは、『いくつになっても、ステキナカマに出会える』という事。壁にぶつかり倒れそうになった時、支えてくれ、癒してくれました。大人になった今、こんな温もりに出会えるなんて思いませんでした。メンバー5人に心から感謝です。

二つ目は、『人の価値観はこんなにも違うものだろうか？』という事で

す。新しい年度が始まり一ヶ月が過ぎ、きっと生徒の皆さんも不思議に感じたり、びっくりしたり、大きく頷いたり日々発見があるのではないですか？全く同じ感性の人はいませんよね。でも、頭から否定するのではなく、他の人の話にもぜひ耳を傾けて下さい。自分の得意なジャンルだけでなく、いろいろ物に触れてみて下さい。遊び心の琴線が今までと違う揺れ方をしますよ。この学校にはたくさんの刺激があります。それを味あわないなんでもったいないですよ。皆様への一年間の感謝をこめて、立ち止まり、振り返って、見えた事を書き連ねました。新しい一年間、心が生み出す本当の笑顔で毎日を過ごしたいですね！

フォーラム委員として皆様と出会えた事、大切にしたいと思います。

どうもありがとうございました。

(堺谷友子)

＜ネットワーク委員会＞

保護者の皆様には、一年間地域親睦会へご参加いただきましてありがとうございました。

お蔭様で22の地域で1～3回の親睦会が開催され、延べSISの保護者296名、OB21名、OISの保護者2名の方々にご参加いただくことが出来ました。又、2月23日には第2回地域リーダー懇親会を開き、34名の新旧リーダーにご出席いただきました。

その中で「12年生が多いので、卒業後は他の地域と合併も考えないといけない」「日程が決めにくい」「OBの方にも参加してもらいたいが、連絡方法など確立できてない」「すでにOB会がたちあがった」など一年間の様子をうかがう事ができました。

新入生や編入生の方に学校のことを知ってもらえるよう配慮して下さったり、学年を超えて親睦が図れるように会を企画して下さったリーダーの皆様に感謝するとともに、地域のネット

ワークが保護者の方々のお役に立っていることが分かり委員会として喜んでおります。

親睦会で出されたご意見は、保護者会や学校にお知らせしていましたが皆さんにご報告するまでに至りませんでした。ご要望について校長先生から2点お答えをいただいておりますので、お知らせしたいと思います。

1. 懇談を2ヶ国語でして欲しい。成績表のコメントを日本語でも書いて欲しい。

-- 外国人教員の担任、教科担当は生徒をとて成長させるもので、コメントが英語になることも生徒の勉強になるので続けます。

-- 面談時の通訳などの不安に関しては、必要に応じフォロー出来ればと考えます。

2. 学校の施設について（図書館の利用・カフェテリア、駐車場の改善）

-- すぐに出来ることは限られますが、時期や条件がそろえば出来ることもあるので何らの形で解決できるようにしたいです。

たくさんのご意見をいただきましたが、全てにお答えできず申し訳ありません。今後もネットワーク委員会が学校や保護者会へのパイプ役になっていければと思っています。

たくさんの方々に支えられ、委員同士も和気あいあいと楽しい一年でした。本当にありがとうございました。

（宮本真由美）

＜ボランティア委員会＞

ボランティア委員会は、コンサートのティーサービスやAPACの食事の準備などを行っています。最初は、材料の準備や時間配分等心配なことばかりでしたが、幸いたくさんのお手伝いの方々にも参加していただき、どの行事も楽しく終えられたと思っています。学校や子供たちの様子も、意外な面から見ることもでき、より親しみが持てました。ぜひ一度気軽な気持ちで参加してみてください。

（趙寿華）

＜広報委員会＞

インターカルチャーの「保護者会だより」の作成が広報委員会の主な活動です。“ 気負わず、できることを楽しんでしましよう ” ということ活動し

てきました。

定例会報告、各委員会・学年からの報告やお知らせ、MIMIコーナーを通して、ホストファミリーの体験談など保護者の皆さまのいろいろな想いを寄稿いただきご紹介しました。保護者会の活動を知って頂く事、保護者の皆さんの声をお伝えすることのお手伝いが微力ながらできたのではないかと思います。また、広報企画として、「ただいま奮闘中」を3回にわたってお届けしました。今、社会人としてがんばっていらっしゃる卒業生をご紹介しました。三者三様それぞれに歩んでいる道は違いますが、地に足をつけ、真摯に自分の人生に向き合っていると思います。この学校をとて愛していて、ここで学んだことが、彼らの中に共通して生きていると感じました。

担当いただいた馬場先生、快く寄稿にご協力いただきました皆さま、たいへんお世話になりました。ありがとうございました。

（金江知子）

《 学年連絡係 》

12年・長谷川理江

〔卒業〕

インターナショナル・フェアが終わると「残る仕事は謝恩会だね」というのが、12年の学年委員の間での合言葉でした。

まず卒業関係予算を記念品代と謝恩会費用に分けました。記念品については生徒卒業委員からのアイデアもありましたが、やはり学校に望まれるものが一番と先生方に決定を委ねた結果、プロジェクター贈呈となりました。謝恩会は、今年はケータリングを頼みました。食べ盛りの子供たちのためにとボリュームに重点を置きましたので、終わってみると料理が少し残っているくらいでしたが、飲み物が少し足りなかったようです。

卒業記念写真も撮りました。OISから借用した卒業式用のガウンと角帽を着用して、学年全体の写真を撮るというものです。ところが角帽の数が15個しかなかったため、15人ずつのグループで撮影してあとでみごとに合成したのです。これはもう名カメラマン斎藤数先生のおかげとしかいいようがありません。

卒業式当日は小雪さえちらつく肌寒い日でしたが、ファッショナブルな装いの卒業生たちはひとりひとり輝いていました。体育館は寒かったけど卒業式は温かい雰囲気、みんな大好きなSISとの別れ、友や先生との別れが尽きない様子でした。

謝恩会はボランティア委員さんをはじめとするボランティアの方たちが働いてくださいましたので、私たちは卒業生の親として謝恩会を楽しむことができました。ありがとうございました。11年生のボランティアの方たちには、今年を参考にして来年の企画を立ててもらえると思います。

謝恩会のあと、卒業生は二次会に流れましたが、私たち親も負けじと近くのレストランを借り切って二次会を行いました。このとき初めてお知り合いになった方もあり、もっと早く知り合っていれば、と話したことでした。

今それぞれに新しいスタートをきった子どもたちは、新しい環境に慣れるのに必死の様子です。ホームシックならぬSISシックに陥る子どもたちの話もよく耳にしますが、これからはSISで培ったパワーで力強く前進していったほしいものだと思います。素晴らしい母校であるSISと先生方に感謝の気持ちでいっぱいです。

11年・時政桂子

「あれっ、今日も香醋煮！」帰ってきた息子が何度言ったことか。インターナショナルフェアで出店する鳥の香醋煮丼のために、みんなでいろいろ味付けを試したのが、ついこの間のことのように思い出されます。おかげさまで、フェアでは、とっても好評ですぐに売り切ることができました。このほかにも、昨年度は、親睦会を3回と「校長先生を囲む会」を実施し、大勢の方に参加、協力いただきました。本当にありがとうございました。何時の間にか、子供も12年生、後1年のSIS生活を親もしっかりエンジョイしましうね。

10年・王 由美

15年度、10年の連絡係として動いて参りました。実は、プラスインターナショナルフェア委員としても活動してきました。いつも絶えず程よい緊張感

（次ページ★に続く）

ただいま奮闘中

＜卒業生インタビュー＞

今回は、本校社会科の南淳先生の登場です。

先生はSIS（旧校名：大阪国際文化中学校高等学校/対話ではSISで統一）の卒業生でいらっしゃいます。母校で教師をすることになるまでの経緯やこの学校に対する思い、仕事に対する思いなどを語っていただきました。

Q：お忙しい中、今日はありがとうございます。社会科担当ということですが、何を教えていらっしゃるんですか？

A：中学2年生の歴史を教えています。

Q：日本史ですか？

A：中学生の場合は、日本史と限らず歴史全般を教えています。

Q：先生はSISの卒業生でいらっしゃいますが、帰国子女でいらしたんですか？

A：シンガポールからの帰国でした。小

学6年生から中学3年まで4年間、シンガポールの日本人学校に通っていました。SIS卒業三期生で、高校1年でここに入学したのですが、やっと全学年が揃った時でしたね。

Q：先生が在校していらしたところ、今では随分と学校も変化しているのではないかと思います。いかがですか？

A：んー、そうですね…。いい面では、行事一つとってみても全学年の生徒・保護者が力を合わせて盛り上げていく、学園全体のパワーが僕らの時代よりもすごくあると思いますね。

Q：高校からの入学ということですが、この学校で学んだことはなんでしょうね？

A：まず、カルチャーショックから始まりましたね。

Q：どんな意味でカルチャーショックだったのですか？

A：僕の通っていた学校は、日本人学校だったので、海外にいながらほとんど

日本の学校と変わらないんです。授業内容にしても学校の雰囲気にしても、偏差値重視の詰め込み教育をする学校だったので、初めは、ちょっと拍子抜けする感じでした。これで勉強だいじょうぶかなあという感じだったですね。で、まあそのうちに思い知らされたことが、自由だけれども…ということ。この「責任感の重さ」ということでした。先生方は何も言いませんからねえ…。それがここで学んだ一番大きなことですね。「学ぶことができた」ということですね。

Q：自由の中の厳しさですね。それは、子供なりにいろいろな体験を通して学んでいくというか、自覚していくことなんじゃないかね？

A：最初、入りたてのころは好き放題やっていたけど、そのうちに、それが自分にかえてくることを知るんです。ここで働くことができるようになった

（★前ページの続き）

と疲労感・・・。

私事ではありますが、他校に通います子供の中学の役員も兼ねていました。一ヶ月に二つの学校に通う事も度々あり、時間刻みの生活を過ごし、なんだか自分は大仕事をしているな、と自信がついたりした一年でした。私の活躍は本当に、全然、全くたいした事はありませんでしたが、ここで、大事な所でいつも連絡をして、10学年をまとめて下さった獅子倉さん、フェア委員長を持ち前のやる気で完璧に務めあげて、みんなの気持ちを一つにしてくれた松原さん、同じ出店系のリーダーとして、学校のコンセントと77数を見事制覇した長尾さんに感謝したいと思います。

9年・米津いづみ

9年の保護者会委員は、それぞれの委員会の行事、学年の親睦会の開催に加え卒業謝恩会の準備があり最後まで忙しい中、私はと言えば名ばかりの連絡係で、他の保護者会委員にいつも助けていただき、余計に忙しくさせてし

まって申し訳ない一年でした。

親睦会は3度開きましたが、2度目はインターナショナルフェアに向けてのクラフト製作をメインにした茶話会でした。これは、フェア委員会のクラフト制作活動日に参加してみたいけれど、知り合いがいないと顔を出しにくい等の話を受け計画したものです。（これを呼び水に週2回の活動日にも参加していただければとの思いも込めて）茶話会には大勢の方が参加してくださり、制作もはかどり(?)話も弾み(!)楽しいひとときでした。

最後に、沢山の行事に9年は個より学年を超えて、大勢の保護者の皆様がお手伝いしていただきました。御礼申し上げます。有難うございました。

8年・クック典子

8年生の保護者として、学年の役員を一年間させていただきました。

各学期に1回計3回、先生方も交えて保護者会を開き、最後にはレストランでのお食事会にて、親睦を深めてまいりました。日頃お逢いできないお母

様方ともお話しすることができ、保護者会は有意義であったと思います。

9年生になり、少しずつ大学を意識しつつ大事な学年になりますので、教育にも熱が入るかと思います。今後共、他校にはない保護者同志の親睦をさらに深めていけたら良いと思っています。

7年・菅野美奈

皆様のご協力で無事一年を終えることが出来ました。

三度の親睦会にもたくさん参加していただき、多少なりとも、お役に立てたのではないかと役員一同喜んでいきます。SIS生活も2年目に入りますが、引き続き親睦を深めて行きたいと願っております。

ので、そのことに関しては生徒たちに伝えるようにはしているんですけどね…。

Q: さて、今は教職につかれています。大学を選択する段階からこの職業に就こうと思っていたのですか？

A: そう言いたいところなんですけど…、なかったですね。確かに、高校生の時に感銘を受けた先生がいて、教師になって戻ってこよう…なんて思ったこともありましたが、自分がどういう大学にいつて何をしたいのか考えるうちに、弁護士になろうかなと思い始めました。その先生の薦めもあり、法律系の大学を考えるようになり、推薦枠があるということでトライしてみようと思ったわけです。やりたいことは決まっていたので、あとは自分なりに条件が揃っていると思う大学を考えた時に、立命館大学があったので受験し、運良くという感じでした。

Q: じゃ、4年間法律を学ばれたんですね？

A: 正確には4年半で卒業しました。実は、半年間、休学のかたちをとりました。

Q: それは、何年生の時ですか？

A: 4年生の時ですね。

Q: 何か理由があったんですか？お聞きして構いませんか？

A: その先の進路を考えた時、ん——、どうしようかなと思ったんですね。大学は法学部に通ったけれど、このまま周りに流されて普通に企業で働くという考え方になっているのはどうなのかなと考え始めて…。ここで一呼吸おいて、考えることも必要かなと思い悩んでいる時に、恩師を訪ねてたまたまこの学校に来たんです。その時に、迎え入れて話を聴いてくれて、相談に乗ってくれたんですね。それで、半年間考える期間をおこうと思ったんです。

Q: それは、4年生の初めですか。

A: 後です。卒論もできて提出しましたが、一科目だけ残して休学という形をとりました。

Q: 考える期間をおこうとあえて休学したわけですね。その間どうされていたんですか？

A: その間、なにもしなかったわけじゃなくて…。その頃、社会的に心の問題が問われる事件がいろいろあって、自分

もそこに着目していたということもあって、今まで法律をやってきたけど、そちらの方に興味がでてきて、カウンセリングの勉強をしようと思ったんです。この学校にはカウンセラーがいるじゃないですか。在学中からいろいろな話ができる環境に自分もあったという経験もあって、心理学の勉強を始めようと思ったんですね。半年後には、大学を卒業して本格的にカウンセラーの養成機関に通い始めました。

Q: 何年くらい行かれたんですか？

A: ここに来るまで、3年間行っていました。

Q: その勉強は、おもしろかったですか？

A: あー、すごーく！おもしろかったですね！

Q: 法律とはまた違うものだと思うのですが…。

A: そうですね。そこで思ったことは、これまでと全く関係ないことをこれから勉強することになるな…と、いうことでした。今までのことを捨てることになるのかな…と思い悩んだこともありましたが、心理学を勉強していくうちに、学問はつながっているということがわかってきて、4年間自分が学んできた法学を生かすことを考え始めたんですね。人の心の問題に携わりながら法学をどう生かせるかなと考えた時に、高校時代のことを思い出して、『あー！教育や！』と思ったわけです。じゃ、今からや！今から教職課程を取ろうと思ったんです。法学部は卒業したけど教職課程を取ってなかったので、教職課程コースの学士入学をしました。人と比べる必要はないけれど、一般的にみると遅れているというプレッシャーを感じつつ、やるんだったら教職をとるために大学にもう一度入り直して、新しく始めようと思いました。

Q: そうですか…！ それは卒業された大学ですか？

A: 違います。佛教大学でそういうコースがあるのでそこに行きました。

Q: カウンセラーの養成機関はどうしたんですか？

A: 同時並行で。教職の勉強をしつつ、心理学の勉強も続けました。

Q: うまく両立はできたんでしょうか？



A: いやあー、教師らしからぬ発言ですが…（笑い）、正直なところ昔は勉強が嫌いでした、いかに力を抜こうかということを考える学生でしたが、この時期は、言葉が汚いですけど「ヘド」がでるくらい本気で勉強しました。でないといつまでも終わらない。プレッシャーもあったし、最短で教職をとろうという目標を立てました。自分を追い詰めて、引きこもりに近い状態で、毎日机に向かって本ばかり読んで勉強していましたねえ。4年半の学生生活とは全然違う生活でした。

Q: 本当にやりたいことが見つかって、それなりに自分を追い詰めて、そういう時って自分の力以上のものができるんですね。可能性の追求というか…。眠っていた力を呼び覚ましたという感じですね。

A: 我ながらびっくりしましたね。今考えてもよくできたなあと思います。4年半の学生生活でも、法律を勉強しましたし、音楽も好きだったので、ドラムをやったんですが、バンドでライブハウス巡りをしたり好きなこともしてたんですが、この時期は、それまでの生活が一変しましたね。

Q: あー、いいお話ですね！！ 苦しかったでしょうが、自分の本当にやりたいことが見つかって良かったですね。休学したその半年間は、とても有意義でしたね。

A: ん——、そうですね。その半年間に、この学校とのかかわりがあったからということもありますし、そこでフッと考える期間をおこうと思うことができたのも、この学校で学んだ『視野を広く』という考え方がないと、で

きなかったんじゃないかと思いますね。

Q: 教育って、すぐに結果が目に見えるというよりも、日常の学校生活の中で意識的にあるいは無意識的に種を蒔かれていて、それぞれの人生の中で、その人の中で育ち続けるもののような気がしますね。

A: 回り道をして勉強していて、周りから置いていかれるという気持ちは本当に苦しかったけれど、性格的に、途中で諦めることができないところがありまして…。社会の中で一人で生きているわけではないので、周りの人のことが目に入りますし…。他人と比べないで自分をどうもつかが大事でしたね。

Q: その半年間に、法律関係の仕事に就くことは考えなかったのですか？

A: 当然ありましたね。そのために4年間自分なりにやったわけですし、弁護士、検事、裁判官もしくは警察官でもいいから公職に就くのが小さいころからの夢でもあったと思うので、考えを切り替えるには、時間がかかりましたねえ…。

Q: 教育実習はこちらでされたんですか？

A: そうです。

Q: 教科は社会を選ぶのに迷いはなかったですか？

A: ちっとも迷わなかったです。日本史が好きということもありますし、法律は社会系の学問ですから。

Q: この学校に就職する際は他の希望者と一緒に試験を受けたんですよね？

A: そうです。

Q: 学校の選択はいろいろあったと思いますが、この学校で教職に就きたいと思ったのはなぜですか？

A: まずその前に、二つ目の大学を2年で修了した時に、まだ心理学の方の勉強が最後のステップであるインターン実習を2年残して終わってなかったので、このまま教職に就くのか、心理学の方に進むのか、両天秤は絶対不可能なのでまたそこで悩みました。

Q: 心理学は3年、教育課程は2年平行しながら勉強する途中でどちらかを捨てようとは思わなかったですか？

A: あっ…、頭になかったですね(笑) 僕の中では我武者羅でしたね。僕になりたい教師というのは、専門科目

はきちんと勉強してというのはもちろんですけど、心理的なことを把握できるというか心のケアもできる教師だったので…。心理学の方はある程度は勉強したし、またやりたくなればそのステップからいつでもできるけど、ちょうどここの教師の募集がある。

『どこの教師にでもなりたいのか』と自分に問うた時に、『ここの教師になりたい』という気持ちがすごく強くて…、なぜなら、卒業生であることを誇りに思っているし、自分を培ってくれた母校であり、人生のターニングポイントである大学4年の時の事での感謝もありますし。ここで恩返しだということしか頭になかったですね…。今考えると恐ろしいですね、こじか考えてなかったなんてね。あかんかったらどうしたんでしょうねえ(笑)。

Q: 思い込むととことんというか、一途に突き進むという性格がわかる気がします。そういう先生を見守ってこられたご両親は、どう思われていらしたんでしょうね？

A: 幸運でして、家族の理解がとてもあって、サポートしてくれたことが大きかったですね。『やれるんやったらやれるところまでやれ、あかんかったらその時考える。サポートはするから』と。この学校もそういうところがありますし、自分の親もそういう考えをしてくれていたんで、ほんまに幸せですね。

Q: 長い目で、自分の子供を信頼してじっと見守るということは親として大変なことだと思うのですが、いいご両親ですね！

A: 自分で選択したことでしたが、挫けたり、愚痴ったり、当たることもあったんですが、しっかり話を聞いてくれていましたね。それはとても力になったし、助かりましたよね。カウンセリングの勉強をしていて、また自分がしてもらった経験から、単に話を聞くのではなくて、共感しながら話を聞いたり同じ目線で話を聞いていたら、何かしら物事は動いていくということを感じているので、自分が教師になったらそうでありたいと思っています。

Q: 一年ここで教師を経験していかがですか？

A: 現実をバシッと叩き込まれた一年で

すね。『まだまだこれからだぞ』と先輩からよく言われます。どんな職業もそうだと思いますけど。

Q: 授業に対してはどうですか？

A: 授業は…、生き物だなとすごく実感しています。子供たちも当然そうなんですけど、マニュアルは通用しないですね。対人関係の重要性も感じてます。この学校は、小学校から積上げてきているレベルが個々に全然ちがいますから、そういう中でどう教えていくかこの一年ほんとに苦しみましたね。授業時間外にもヘルプして、なんとか進めていけるという現実がありますね。秋・冬学期には高校地理も教えていまして、地理ではほとんど感じませんが、中学歴史は特にその必要性和現実を感じます。そこら辺が僕の大きな課題ですね。

Q: 生徒との関わりはどうですか？

A: 相対的ですが、それぞれの生徒を個別に見たいとは思っています。出来るだけ関わろうと思えば思うほど、一言声をかけることの大切さを感じますね。廊下でニコッとするだけでも、そこから始まるんだと思います。いろんな意味で教師としてたどいま勉強中です…。

Q: ただいま奮闘中ですね。

A: そうですね。ここに来てよかったなと思っていますが、心がけていることは、母校に戻ってきたというので甘えもあるのではないかと、悪い意味で社会勉強が足りないという見方もあるかもしれませんが、それは自分次第だし、自分に甘えないということを肝に銘じています。

Q: 先生が在籍していた頃とは、生徒の質も変化していると思うのですが、先生から観て気になることはありますか？

A: ん——、5つのリスペクトを忘れていて、もしくは大事にしていないということが、以前より感じられるということですかね…。声をあらわにして自分の学校の良いところを否定するということは卒業生として悲しいですねえ。教え子たち・後輩たちというのは、教師・先輩からすればやはり無条件にかわいいものですから、彼らにもこの学校にプライドをもってほしいですね。

Q: いいなあと思うところはどんなところ

ろでしょう？

A：自分を表現することに惜しみない努力をすることですね。それと団結力があると思いますね。何か行事がある時のパワーはすごいと思いますね。この素晴らしさは、本当に大事にしてもらいたいと思います。

＊ ＊今日は、お忙しいところ御協力いただきましてありがとうございました。

インタビュー後記

勉強に追い立てられていた中学時代、見た目はいい子をしながらやり場のない心はささくれていたといいいます。『ここに入学した当時、お前は希望も情熱も何もなくほんとうに冷めていたなあ』と、恩師からも言われるそうです。血気盛んな高校3年間に、エネルギーの出し方をこの学校で教えてもらった。この学校に温かさを感じることができて、それから変わったような気がする。言ってしまうと、とにかくこの学校が大好きなんです。南先生はおっしゃいます。

社会全体が病んでいるような事件やニュースばかりが報道される毎日。生き難い時代かもしれません。ここでご紹介した卒業生の皆さんは、三者三様それぞれに道は違えど、自分自身に正直に、そして真摯に人生に向き合っているらしいです。必ずしも安易な道ではありません。卒業生であることに誇りを持っていて、この学校をとっても愛していて、ここで学んだことが彼らの中でしっかりと生きています。

青空を仰ぎ見るような、いのち芽吹く躍動感に満ちたこの季節のような、誇りに思ような方達でした。ありがとうございました。

MIMIコーナー

《無題》

大学を卒業するまで随分と多くの先生方にお世話になりました。その中で、私にとっては忘れ得ない先生が何人かいます。

その一人は、高校2・3年の担任をしてくださった国語科の先生です。知識が豊富、文学に造詣が深く情熱的、授業はいつも学ぶことがいっぱい楽しくあったという間違った記憶があります。先生からは多くを学びました。

授業の中で、ご自分の幼子を亡くされたときの話をしてくださいました。夜半に病院から車で帰路に着く時、外はぼた雪が沈沈と降っていたそうです。そして、静かに目を閉じ、宮沢賢治の「永訣の朝」を肅々と暗唱されました。哀しく長い詩です。教室は静まり返り、生徒は皆先生の顔を凝視し、一心に先生に心を傾けていたように思います。きっと先生はこの詩を通して、愛する妹でありまた彼の良き理解者であったとし子を亡くした宮沢賢治の心の深い哀しみを、理解し共有したのだと思います。

もうあれから30年以上にもなるのに、今でもあの時の情景が鮮やかに私の中にあります。それを想うとき、その時のその場所にタイムスリップしてしまう感覚になるのです。

前にも後にも宮沢賢治に関する本は随分読みました。でも、彼の本当のすばらしさと奥深さを知ったのは、子どもたちが生まれた後でした。

過去の時間と空間を共有できたのは3年。先生から頂いたさまざまな何かを、今も自分なりに育てているような気がしています。

子どもたちはこの学園で、先生と、友達とどんな出会いをしていくでしょうか。

《身辺雑記》

しつこい肩こりに降参して、近所の鍼灸院を訪ねました。下記、こざれいな待合室に掲示されていました。ンー....、なるほど....。

養生録 [春] = 日常生活 =

就眠をいくら遅らせても良いが、朝は早めに起きて散歩するのがよい。頭髮は形をゆるめ、全体をゆったりと自由にする。心中の意欲を起こし、育てる。そして、起こした意欲はのびのびと成長させるべきで、抑えつけてはならない。生長に役立つものはすべて施すべきで、奪ってはならない。これが春に適応し、「生氣」を保養する道理である。

<保護者会だより編集後記>

このインターカルチャ5月号が発行されるのは、葉桜のころでしょう。それもまた、新緑が目眩しく、躍動感に満ちていて心地のいいものです。

編集に勤しむ今、さくらは盛り。いのちさかんなる季節の花、殊にもさくらはとくべつの花で、人々に待たれて咲き、散るな散るなど惜しまれて散る。花は花として咲き、花として散る。その潔さを日本人は愛し、花といえば桜、武士は桜と比肩することで誇り高く生きたのです。

さくらの花は、きれいな声をしていると人はいい、さくらの花は、いいかほりだと人はいう。さくらは、すこしさみしいと私は思う。

さみしさの 桜は白し ただ白し (新子)

新しい仲間を迎えて、新学年がスタートしました。子供達と共に、また学園生活を楽しみましょう！

5～6月行事予定

月 日 曜

- 05 13 木 春季リサイタル 16:00
 29 土 学園祭 10:00-14:00
 31 月 教員研修日・休校
 06 11 金 高等部スポーツ表彰式 16:00
 15 火 高等部春季コンサート 18:30
 17～19 SIS模擬国連(京都)
 18 金 OIS高等部卒業式 19:00
 23 水 SIS編入選考
 24 木 中等部春季コンサート 16:00
 30 水 SIS春学期終了・OIS学年終了

学園祭のご案内

5月29日(土) 10:00-14:00

テーマ: Holiday Celebration

駐車場には限りがありますので、公共交通機関のご利用をお願い致します。

編集後記

SIS広報センターは、この「インターカルチャ」の編集・発行と、学園HPの作成・更新、「研究紀要」等SIS出版物の編集・発行を主な仕事としています。この4月からは井藤先生に替って志垣先生に手伝っていただくことになりました。井藤先生お疲れ様でした。また、保護者会広報委員の方々も1年間ありがとうございました。新委員の皆さん、どうぞよろしくお願いいたします。(馬場博史)

4月は色々な新しい事が始まる季節、私自身も1年間の育児休暇を終えて、心機一転、学園に戻ってくる事が出来ました。毎日仕事と育児で大変ですが、1年ぶりの学園は、やはり活気があって、生徒たちからエネルギーをもらっているんだなあと感じる今日この頃です。この4月から、SIS広報センターのお仕事もする事になりました。この学園には長く居るのですが、インターカルチャーの編集は初めてで、少し不安もあります。でも、これを通して、また学園の新しい面を発見しつつ、頑張っていきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。(志垣満理)

インターカルチャへの記事・ご感想等は、e-mailで hbaba@senri.ed.jp までお送り下さい。インターカルチャはバックナンバーも含めて本学園ホームページ www.senri.ed.jp/interculture でもご覧いただけます。また学園ホームページにつきましてのご意見ご感想などは、webmasters-j@senri.ed.jp までお願いします。

編集: SIS広報センター 保護者会だより記事: 保護者会広報委員 カット: イラストレーションクラブ生徒

Senri International School Foundation (SISF)
 Senri International School (SIS)
 Osaka International School (OIS)
 4-4-16, Onohara-Nishi, Minoh-shi, Osaka 562-0032, JAPAN
 TEL 072-727-5050 FAX 072-727-5055

学校法人千里国際学園(SISF)
 千里国際学園中等部・高等部(SIS)
 大阪インターナショナルスクール(OIS)
 〒562-0032 大阪府箕面市小野原西4丁目4番16号
 電話072-727-5050 FAX 072-727-5055

年間発行予定と主な内容 ()は発行時期

- 春学期 5月号(上旬) 卒業式、入学式、大学等合格状況
 6月号(中旬) 学園祭、教育実習
 秋学期 10月号(上旬) 夏の宿泊行事、夏の諸活動報告
 11月号(中旬) 運動会、玄関コンサート
 冬学期 2月号(上旬) オールスクール・リタ・クショ、模擬国連
 3月号(中旬) 入試結果、卒業生へ贈る言葉
 他に留学報告、スポーツ結果、各種表彰、授業紹介、生徒会・クラブ活動等

千里国際学園は、帰国生徒を中心に一般日本人生徒や日本の教育を希望する外国人生徒も受け入れて日本の普通教育を行う千里国際学園中等部・高等部 Senri International School (SIS) と、4歳から18歳までの主に外国人児童生徒を対象とする大阪インターナショナルスクール Osaka International School (OIS) とを、同一敷地・校舎内に併設しています。

両校は一部の授業や学校行事・クラブ活動・生徒会活動等を合同で行っています。チームスポーツはこの2校で1チームを編成しており、APAC(Asia Pacific Activities Conference)の公式試合や、近隣のインターナショナルスクール、日本の中学・高校との交流試合等に参加しています。このため、校内ではインターナショナルスクールの学校系統に合わせて、6年生～8年生(日本の小学6年生～中学3年生春学期)をミドルスクール(MS)、9年生～12年生(日本の中学3年生秋学期～高校3年生)をハイスクール(HS)と呼んでいます。